

構築会
たより

2005



目 次

■会長挨拶	03
	坂 雅勝 (A69)
■部門たより	04
社会基盤工学部門	常田 賢一
建築工学部門	相良 和伸
■前田幸雄先生を偲んで	06
前田 幸雄	松井 繁之 (C66)
追憶 (前田)	加藤 久人 (C78)
■名誉教授の先生からのおたより	08
土木工学科の名称変更について	榎木 亨
お見舞いと近況報告	森 康男
退官その後	松井 保
(また)どうでも良い近況	舟橋 國男
「MOTTAINAI」について思うこと	柏原 士郎
■名誉教授の先生からの一言メッセージ	13
五十嵐定義	五十嵐定義
樋崎 正也	樋崎 正也
福本 喜士	福本 喜士
脇山 廣三	脇山 廣三
村岡 浩爾	村岡 浩爾
■特集「エコ時代の土木・建築」	14
環境に貢献する建築とは	生駒 芳明 (A78)
舗装におけるエコへの取組み	北川 真 (C79)
エコ時代の公共事業を考える	芝池 利尚 (C82)
エコ時代における建築環境設備関連の技術開発	樋口 祥明 (A83)
エコに強い土木建築	原口 和靖 (C88)
エコ時代の建築の一例紹介	高山 真 (A89)
自然再生：土木の進化が問われている！	中村 圭吾 (C94)
ストックでありつつフローである建築の可能性	高草大次郎 (A95)

■卒業生たより	28
卒業50年 半世紀を経て	堤 道夫 (C55)
こんな家に住みたいナ！	荒木兵一郎 (A55)
卒業40年 良き師、良き朋(とも)、良き同窓	島田莊八郎 (C65)
卒業30年 卒業30年会“FOREVER YOUNG!”を開催して	前田 敏 (C75)
turning point	家倉 泉 (A75)
卒業20年 「卒業後20年を経過して」	玉井 昌宏 (C85)
卒業20年にあたり	杉本 正三 (A85)
卒業10年 私の課題	荒木 進歩 (C95)
■学生からのたより	38
広場なんて不要？	建築工学専攻博士後期課程2年 田中 康裕
ランニングハイ	土木工学専攻博士前期課程2年 田力 弘道
学び多き大学生生活	建築工学専攻博士前期課程2年 井垣 圭二
チョコレートの一つや二つ…	社会基盤工学部門博士前期課程1年 神本 祐一
研究室改装	建築工学部門博士前期課程1年 西口 純子
大学生活を振り返って	土木工学科目4年 菅 直子
残りの学生生活	建築工学科目4年 落合奈津子
学校生活について	土木工学科目3年 林 宏名
夏休みを終えて	建築工学科目3年 宿利 隆
社会基盤工学科目に分属されて	土木工学科目2年 長澤 稔郎
隨 想	建築工学科目2年 平野 晓子
■2005年度役員会報告	47
■構築会役員一覧	50
■支部役員一覧	51
■支部たより	52
大阪支部	
愛知支部	
東京支部	
兵庫支部	
広島支部	
■構築会会則	57
■事務局たより	59
■教室たより ~教職員構成~	61
■会員動静	63
■業界案内	91

ご挨拶



構築会会長
坂 雅 勝(A69)

構築会会員の皆様におかれましては、ますますご活躍のこととお喜び申し上げます。この度総会で構築会会長に就任させて頂きました。この1年間、皆様方の御協力を得て、構築会の発展に努めて参りたいと考えています。私は昭和44年(1969年)の卒業で、構築工学科として卒業した最後の学年であり、また大阪都島の東野田学舎最後の卒業生でもあります。会長になって、本部・支部の総会に出席させて頂き、最長35年ぶりに旧交を温めることができ、本当に感激しました。

構築会は1950年の第1回卒業生以来すでに55年の歴史を数え、現在会員数は正会員で約4,000名、その他の会員を合わせて約4,500名に上ります。また土木・建築が一同に会しているという、全国にもまれな会だと思います。私の勤務しております大阪市役所では構築会として、いまOBを含めて100名弱の会員がおりますが、会員の繋がりとして、大変仕事の上でも助かることが多いと思っています。いろいろな意味で是非本会を盛り立ててまいりたいと思います。そのためには、本部・各支部活動の充実はもとより、各職域等でお作りいただいている会との連携も今後の課題と考えております。

さて今年の構築会たよりの特集は「エコ時代の土木・建築」とさせて頂きました。

環境の時代といわれて久しいのですが、地球の温暖化防止、環境負荷等の低減を図るため、代替エネルギーの開発・利用、省エネ・省資源の実現、リサイクルの推進、廃棄物の減量、施設の長寿命化等、土木・建築の分野で果たすべき役割は大変大きなものと考えています。

そこで産官学の領域でご活躍の会員の皆様方から、このテーマについて、今取り組まれている、また今後の課題や展望などを幅広く寄稿いただきました。経済的発展と環境問題の両立を図りながら、持続的な社会の実現を目指すという難しい時代の中、改めてこのテーマを取り上げましたが、ご参考になればと思っております。

最後になりましたが、構築会会員の皆様方のご発展ご健勝をお祈りしてご挨拶とさせていただきます。

法人化2年目に当たる今年度は、「土木」の名称が消えて「社会基盤」の名称に変わった点が大きな変化となります。学部では土木工学コースから社会基盤工学コースに変わりましたが、大学院の改組では複数の旧の専攻から構成される新しい専攻が組織化されました。旧の船舶海洋工学専攻、土木工学専攻および建築工学専攻の3つで構成する新専攻は「地球総合工学専攻」となり、旧・環境工学専攻は地球総合工学専攻には入らずに、環境・エネルギー工学専攻内の組織としてスタートしています。また、旧・地球総合工学専攻は新・地球総合工学専攻と環境・エネルギー工学専攻に分かれました。

新しい地球総合工学専攻の下には6つの講座が置かれていますが、旧・土木工学専攻に関係するのは社会基盤工学講座および社会システム学講座の2つになります。

ます。旧の土木工学専攻に相当する組織名称は無く、正式には使えないのですが、日常的、便宜的、実務的には「社会基盤工学部門」と呼んでいます。土木の呼び名が消えて社会基盤に変わり、寂しい気もしますが、時代の流れを感じる所です。部門の中には、正式には上記の2講座があるわけですが、従来の研究室単位は「領域」と呼ばれています。社会基盤工学部門には、社会基盤設計学、構造工学、地盤工学、地球保全総合工学、国土開発保全工学、水システム工学および交通システム学の7領域がありますが、地球保全総合工学領域は4月から入っています。

このような時期、8月には奈良敬君(C76)を岐阜大学から教授として迎えることができました。西村宣男教授の後任として構造工学領域を担当しています。また、国土開発保全工学領域に有田守君が助手として

社会基盤工学部門の近況

採用されています。なお、長年に渡り教室の事務を担って頂きました事務補佐員の楠木晴美さんが3月に退職されました。

最近、学生の就職について特に感ずるのは、ゼネコンを希望する学生が少ない(2005年就職:5人、2006年同予定:2人)ことです。社会的な背景を反映していると思われますが、将来の社会基盤の創造・保全を支える建設分野の中枢を担う人材の底堅さされることから、対応策を産学連携で考えることが痛感されます。そのような中で、2006年春の国土交通省および農林水産省への採用予定者がそれぞれ3名および1名であることが明るいニュースです。なお、国土交通省については、学官の連携強化の一環として、平成17年11月に近畿地方整備局との交流会が立ち上がり、学

として地球総合工学専攻はもとより工学研究科にその活動を広げる方向で対応しながら、連携強化を推進する予定になっています。社会基盤に関わる中枢的行政機関との連携により、学における研究開発の推進と社会貢献の具体化が期待されます。学部学生の教育については、2005年の新入生からコース認定の対象となる、JABEE(Japan Accreditation Board for Engineering Education:日本技術者教育認定機構)の2008年受審に向けた準備を進めており、教育の充実とともに教員の意識も変わりつつあります。

今後、益々学内外を取り巻く環境が厳しくなると思いますが、社会基盤工学部門が将来に渡って、その存在意義を維持、向上するためには、構築会の皆様の御理解、御支援が必要でありますので、一層の御厚誼を賜りますように御願い申し上げます。



社会基盤工学部門長
常田賢一(C74)

昨年4月1日から国立大学法人大阪大学が発足して既に1年半ほどが過ぎようとしています。工学研究科の組織も本年4月より大専攻体制に移行し、船舶海洋工学、社会基盤工学(旧土木工学)、建築工学の3専攻と地球総合工学専攻の関連領域とを併せて新しい大専攻である地球総合工学専攻として再編されました。この再編に伴い、旧専攻を部門という名称で呼ぶこととし、これまでの建築工学専攻は建築工学部門ということになりました。

また、建築工学部門の教員構成も大きく変化しております。2004年10月に建築・都市形態工学領域の阿部浩和助教授が定年退官された吉田勝行教授の後任教教授に昇任されておられます。2005年3月には建築・都市人間工学領域の柏原土郎教授が定年退職され、現在は武庫川女子大学生活環境学部教授と

してご活躍の場を移されております。そして、2004年10月に地球総合工学専攻空間文化デザイン工学領域の古川忠穎学内講師が名古屋大学環境学研究科都市環境学専攻助教授に、本年4月には建築力学領域の向井洋一講師が奈良女子大学生活環境学部人間環境学科助教授に、建築構造システム学領域の桑原進学内講師が京都工芸織維大学工芸学部造形工学科助教授に、それぞれ他大学に出られて昇任されております。そして、昨年3月に退官された舟橋國男教授の後任教教授として本年4月1日に奥俊信教授が北海道大学よりご着任、7月16日には柏原土郎教授の後任教教授に横田隆司助教授がご昇任、10月1日には桑原進学内講師の後任として向出静司助手がご着任されておられます。また、専攻再編に伴い建築工学部門に4月に合流した旧地球総合工学専攻の空間文化デザイン工

建築工学部門の近況

学領域は建築構法デザイン学領域と名称を改め、古川忠穎助手の後任として瀧野敦夫助手が任用されました。さらに、これまで工学研究科のキャンパス計画を担当されていた木多道宏助教授は4月から新たに設置された全学のキャンパスデザイン室に移られ、また、同室には7月1日に大谷博三助手が着任されておられます。以上のように大幅に陣容が変わっておりますが、これまでと同様皆様のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

現在の学生数は、学部生を含めて総数269名、その内25名が留学生です。そして、大学院後期課程(博士課程)には、企業に所属しながら就学しているいわゆる社会人学生が10名在籍しています。建築工学部門では社会人教育の一環として社会

人学生の受け入れにこれまで以上に力を入れ始めており、いつでも気軽に問い合わせいただければと思います。学部教育に関しましては、カリキュラムの見直しをするとともに具体的な学習・教育目標を定め、JABEEの受審を目指して様々な活動を開始しております。今後、大学教育のあり方についてなどのアンケートに皆様のご協力をお願いすることもあるかと思います。さらには、実務経験豊富な先輩方にボランティアとして積極的に大学教育に関与していただく機会を作ることも考えております。

構築会会員の皆様におかれましては、今後とも大学の動向に关心をお持ちいただき、お力添え賜りますようよろしくお願い申し上げます。



建築工学部門長
相良和伸(A特)



追悼寄稿

前田幸雄先生を偲んで

「前田幸雄先生を偲んで」

松井繁之
(C66)

本学名誉教授・前田幸雄先生は、平成17年3月21日腎不全によりご逝去されました。享年83歳でした。二年弱に亘って芦屋市民病院での闘病生活を送られていました。この間、奥様一人で献身的に看護をなされました。その甲斐もなく逝かれてしましました。

入院当初において危篤との診断がなされ我々、大変落胆いたしましたが、不思議と持ち直されました。名誉教授を始めとして多数の関係各位からお見舞いを受けられ、お見舞いをいただいた人たちの話に対応できる状態にまで回復の様子も見せられました。しかし、腰の痛みのためと推測しておりますが、立ち上がることは出来ない状態でもありました。本当に寝たきりの闘病生活のまま天国に召されました。私ども先生の訃報に接し、誠に痛惜にたえません。茲に、謹んで哀悼の意を表します。

四年ほど前、日本鋼構造協会の鋼構造の発展に関する回顧録特集「長老に聞く」において対談させていただきましたのが最後のご業績であったと回想しております。ほぼ80歳まで鋼構造とりわけ橋梁には現役技術者を凌ぐ関心を持ち続けておられました。

大阪大学工学部土木工学科教授として、教育とともに、構造工学・橋梁工学の発展に多大の貢献をされますとともに、多数の研究者・技術者を輩出され、門下生は各界において大変立派に活躍をしております。先生のこのような多大のご貢献に対し、大阪大学名誉教授の称号を授与されましたことを始めとして、七十七歳の時には勲三等・瑞宝章の叙勲をお受けになりました。土木学会からは、田中賞、名誉会員、功績賞を受賞されまして、都度、門下生とともに喜び申し上げましたこと走馬灯のごとく思い出されます。

前田先生は、衆知のように英語がご堪能で、国際橋梁構造協会(IABSE)の鋼構造委員会委員長を勤められましたことで分りますように、外国研究者との交流を深められ、国際貢献もされました。その証しとして、IABSEからは特別会員、アメリカ土木学会からはフェローの称号を受賞されました。大阪大学の教授時代にはしばしばご自宅に外国研究者をお招きになり、私どもを同席させて、教育・研究における国際レベルを理解させると共に、国際交流の重要さをご教授いただきましたことは先生特有の教育法であったと、貴重な思い出となっております。本年8月29日からドイツのミュンヘン工科大学にて第6回日独橋梁シンポジウムが開催され、初日から参加しておりましたが、開会式において組織委員長のアルブレヒト教授が前田先生のご他界を冒頭に紹介され、先生が橋梁構造・合成構造の発展へ多大のご貢献をなされたこと、この日独二国間橋梁シンポジウムの創設発展に大きく貢献されたことを紹介し、哀悼の辞を述べられました。そして全員で1分間の黙祷を捧げました。外国においてこのような式典をされましたことで、再度、前田先生のご遺徳を偲んだ次第であります。

これまで受けましたご薰陶と先生の気風は、長く門下生の心の中に生き続けることでしょう。どうか安らかにお眠り下さい。



78春 神戸摩耶大橋にて前田先生とDr.Heins

前田幸雄先生へ感謝をこめて

加藤久人
(C78)

本年、'05年3月21日、故前田幸雄先生の訃報に触れ、30年来さまざまな面にわたくって常に熱くご指導、ご鞭撻をいただいた懐かしい先生の思い出が次々と蘇えってきました。

'74春、教養時代、イ号館での世界の橋梁事情をテーマとした、当時まだ珍しかったカラースライドによるご講義が先生との最初の出会いでした。先生ご自身が撮影された黄金色のベラザノナロウス橋や緑の森に映えるコールブルックデイルのアイアン橋などの写真にぐいぐいひきつけられ、これが前田研を志願した動機になったと思います。「橋が綺麗に写っているだけでは不十分で、橋袖の柳を写真に取り込んでいることが優れた美的印象、芸術性を与えてくれるのです。」と先生ご自身が恍に入つておられたのを記憶しております。

'79夏、ご縁あって、米国メリーランド大学土木工学科の実務派で知られた、ハイズ教授の研究室へ送り出していただきました。渡米に際し、先生は必ず月に一度、状況報告を提出するようお命じになり、それを実行するべくお手紙を書きました。この手紙に対して先生は、逐一ご丁寧な返事を下さいました。時が経ち、先生の当時のご多忙が理解できるようになるにつれ、私のような者にお手紙を書いてくださる時間をどのように割いて下さったのか、驚嘆と感謝の念は益々深くなりました。'85年11月、先生に仲人をお願いした結婚披露宴でのスピーチで、私の米国からの手紙の内容について、泣き言ばかりが書かれていたことが暴露され、以後、家族また社内でも泣きの加藤君という愛称が定着してしまったのは余談です。

'91夏、ペレストロイカによるソ連邦崩壊直後にサンクトペテルブルグで行われたIABSE(国際橋梁・構造工学協会)シンポジウムに東京湾横断道路の工事報告のため参加いたしました。この時、先生が欧米各国、歴々の先生方の中で名誉会員の称号を授与されるのを目の当たりにすることができました。(※1)

また、'02秋、先生に査読いただいた「世界の橋(丸善出版)」完成のご報告に伺った折には、「こんなものをもらったよ。」とASCE(米国土木学会)の名誉荣誉称号の記念楯を見せて下さいました。これが先生の笑顔に直接触れる最後となりました。(※2)

先生は享年83才、最初にお会いしたのが18才、私も83才まで命が続くとして、そしてついに今年50才となったことから、社会人として丁度中間点でのお別れとなりました。今後も先生の教えに従い、明るく前向きに前進し、次回天界にてお会いする時、「残りの半分も楽しく、常に積極的に活動できました。」と報告できるよう、再び先生に微笑んでいただけるよう、頑張りたく思います。以上、しばしのお別れのご挨拶といたします。

(※1) <http://www.iabse.ethz.ch/association/awards/honorarypres/>

(※2) http://www.asce.org/pressroom/news/display_press.cfm?uid=1227

■ 土木工学科の名称変更について

名誉教授 楢 木 亨

今さら土木工学科の変革、行方をくどくど言うつもりはない。しかし土木学会誌の2005年の7月号に特集として「土木工学科の変革」が取り上げられ、座談会も詳細に述べられていたので興味深く読ませていただいた結果、自分の意見も書いてみたくなったのでこの一文を草してみた。

土木の仕事に携わっている人の多くは大学から「土木工学科」がなくなり「社会基盤工学科」「土木環境工学科」「建設システム工学科」などの名前にかわっていることはご存知であろう。しかしあまりに多くの学科名(40以上あると思われる)に変わっているので、元は土木工学科であったこともわからず、または何を教える学科であるかさえも予想できない。土木に関連する仕事をする人々ですら判らないのであるから、一般の人々にとっては全く想像もつかないであろう。私の家内でさえ、阪大、大産大から土木工学科がなくなり、社会基盤工学科、都市創造工学科になったことは知らない。また知っても何故土木工学科からそのような名前に変わったのかを問いかけてくる。学会誌によれば現在「土木工学科」をもつ大学は全国で9大学に過ぎないようである。かつては全国の大学で一律に土木工学科を名乗り、それから現在の社会基盤となる公共施設を整備している土木技術者が育っていったわけで、それらの多くの人々が現在でも土木技術者として名乗り活躍している。

一方、資格面では「土木技術士」「土木施工管理技士」が現存し、土木技術者は確実にその存在感を一般の人々に認知されている。しかも土木の仕事は大昔より行なわれ、それらの仕事の内容も一般の人々がよく理解しており、例えば災害復旧の場合には土木技術者の仕事、道路建設、ダム建設、河川改修なども土木の仕事と認めている。

この様に社会がよく理解し、認めている技術者を育てる大学から何故に学科名が変わっていくのか、大学に縁の深い私ですら解らない。土木教育の内容が時代とともに変わっていくことは当然であり、これによって土木卒業生の資質が変化していくのは当たり前であるが、単に学生の集客力がない、マスコミに公共事業が批判されているからといって土木という名を捨て去るのはいかがなものかと思う。

情報化時代、コンピューターの時代ではあるが、私が大学にある時、多くの会社のトップの人々は、大学では非基礎(水理、構力、土質)を教えておいて下さいと言っていた。それから10年も経っていないので、この考え方は変わっていないとするならば、会社が土木技術者として採用するのであれば、大学が如何に名称を変えても新入社員には上記の基礎学力を要求するであろう。そこでこれからの会社の採用試験の面接時の状況を想像してみた。

試験官：貴方の大学は環境システム工学科になっていますが、土木設計に必要な構造力学、土質力学という講義はありますか？

応募者：環境システム工学科は元々土木工学科ですので構造力学、土質力学の科目はあります
が私は取っておりません。

試験官：だから貴方の答案は白紙が多いのですね。それで設計ができますか？

応募者：できないでしょうね！

大学教育に必要なのは大学ではなく社会であり、また社会を構成する会社である。また学生も会社に採用して欲しくて大学教育を受けるものと思われる。その時上述の面接の応答で応募者は採用されるだろうか？どうか各大学に共通した土木を想起できるような名称に再度改めていただきたいものである。

■ お見舞いと近況報告

名譽教授 森 康男

構築会会員の皆様お変わりなくお過ごしでしょうか。

去年から今年にかけて、国内外で巨大な自然災害が続発しました。去年の数々の台風による水害や、新潟地震、海外では、インドネシアの津波災害、ハリケーンによるニューオリンズの水害、カシミール地方の大地震など、いずれも自然のエネルギーの巨大さに驚かされ、災害の悲惨さには目を覆いたくなります。さらには、ロンドンの地下鉄爆破事件やJR西日本の脱線事故も最近の痛ましい事件であります。

われわれの職業は自然災害や鉄道事故には深い関わりを持っていますので、会員の中にはこれらの災害や事故に直接間接に関係された方もおられるのではないかと思います。それらの方々に、特に小野正順君（C特）のご遺族の方々に、心からお見舞いを申し上げます。また、JR西日本の事故の場合は直接に関係され、現在もなお事故後の安全対策や被災者の救援、補償などに日夜ご苦労されている会員も多いのではないかと推察しております。

私は鉄道工学が専門ではないのですが、JR西日本の事故には強い関心を払わざるを得ません。それは、毎週JR西日本の列車で福井に通い、1ヶ月に1、2回は新幹線で上京しているだけではなく、鉄道は（飛行機や自動車に比べて絶対に）安全であるという私自身の考えにも疑問符が付いてしまったことです。今回の事故の直接の原因は、許容速度を超えて列車が半径300mのカーブに突入し、転覆したものと言えるのでしょうが、では、なぜ制限速度を30km/hも超過して運転していたかということについては、運転手が死亡していることもあるって、私の知る限り、分かってはいません。民営化による会社の経営方針、過密ダイヤ、運転手の労務管理などなどの要因が種々取りざたされています。

鉄道事故に限らず、このような事故の原因として必ず問題になるのは、安全対策と経済的効率との対立です。経済的効率を上げようとすると安全対策費を節減しようということになり、逆に、安全対策を優先すると、経済的効率は低下するというジレンマがあります。しかし、今回のJR西日本の事故によって生じた乗客の悲惨な取り返しのできない人的被害のみならず、JR西日本自身が被った経済的社会的損害の甚大さを考慮すると、果たして、経済的効率と安全対策を天秤にかけて論じて良いのかと疑問に思います。「安全は何者にも優先する」のではないかと考えます。

さて、今年はまた郵政民営化でも騒がしい年がありました。また、われわれに關係の深いところでは、10月1日に日本道路公団などが創立50周年を迎えたとして民営会社に変わり、「公団による非効率的」と言われる高速道路の効率的経営に出発することになりました。民営化する前から高速道路の維持管理費の削減が始まり、最終的には3割の削減を目指すと聞いております。ここでも経済的効率と安全対策の対立が始まると危惧しております。関係される構築会会員の方々には、言い古された言葉ですが今まで「安全第一」を貫かれるように強く希望します。

おかげさまで、今年も元気で福井工大で教育と研究を続けております。後期は学部3科目と大学院1科目の講義を担当し、その他2科目の少人数クラスと、5人の卒業研究を受け持っています。福井に滞在する3日間は目の回るような忙しさです。ドライビング・シミュレーターを用いた「高齢運転者の安全」をキーワードにした研究も、少しずつ進んでおります。年末からは、飯田克弘助教授と共同研究を始めようと準備しております。

末筆ながら、会員の皆様方の益々のご健勝を祈りつつ、近況報告といたします。

■退官その後

名誉教授 松 井 保

早いもので、平成16年3月に退官して1年7ヶ月も経ちました。当初は、一種のカルチャーショックでしょうか、何をするにも戸惑うことも多く、時間もかかりました。しかし、よくよく考えてみると、退官前の10年間ぐらいは、超多忙のため、基本的なことに対する手を使わずに口だけでこなしてきたのです。いざ自分で手を動かそうとすると、時間がかかるのは当然のことなのです。特にコンピュータ関係は深刻な状況がしばらく続きました。なにしろ、退官前に自分でしていたのは、メールに返信する程度だけだったのですから。

しかし、案ずるより生むは易しとか、捨てる神あれば拾う神ありとか申します。まず、基本的考え方として、自分で手を動かすことは脳細胞の活性化に繋がる筈であると思うことにしました。特にコンピュータに関しては、非常に長けた方に幸運にもめぐりあって、面倒を見ていただきました。そのアドバイスの中で、当初、非常に役立ったのは次の2つのコメントでした。

- (1) コンピュータをマスターする度合いはコンピュータに向かい合っている時間に比例する。
- (2) コンピュータは、どのように扱っても壊れることはめったにない。

このアドバイスを頼りに、朝から深夜までコンピュータに向かっていたこともあります。そして、当面の目標として、独力でパワーポイントを作成することを掲げることにしました。最近、講演用の約70枚のパワーポイントを何とか完成させ、この目標を達成することができました。

以上のように、当初のカルチャーショックは今ではまったく残っていません。現在では、脳細胞が以前より活性化してきたように感じています。しかし、自分で手を動かすことは時間がかかるのと、社会的活動や技術委員会活動などあまり減っていない状況ですので、退官前よりかえって時間的余裕がなく慌しい日々を過しています。

以下では、社会的活動の一端を紹介します。一つは、10年ほど前から代表を務めていますCVV(シビルベテランズ&ボランティアズ)です。これは、主として第一線を退いた土木技術者のボランティア集団で、土木技術者の65～75歳人口が現在の約6千人から2025年には約6万人になる状況において、非常に重要な活動であると思っています。街づくりグループやアドバイスグループとして、社会に役立つ活動を求めて、メンバーの方々が種々の行事や見学会などのボランティア活動を活発に行っています。興味のお持ちの方はHP(<http://www.cvv.jp/>)を見て、積極的にご参加下さい。

もう一つは、理事長を務めていますCOBRA(NPO法人建設副産物リサイクル促進機構)です。これは、建設副産物のリサイクルに関する調査・研究・提言・情報提供などを積極的に行い、リサイクルに対する理解と意識を高めるとともに、次世代に向けた「資源循環型社会」の形成に貢献することを目的にしています。すなわち、講演会やゼミナールをたびたび開催し、種々の調査・研究を行うとともに、最近の豪雨災害に鑑みて、事業者と協働して河川堤防強化事業の促進に積極的に寄与すべく、COBRA内に河川堤防部会を設置して、堤防強化用盛土材の改良検討などの活動を進めています。このNPO法人は、個人会員(年会費1万円)を中心として構成されており、現在の会員数は60名を越えています。興味のお持ちの方はHP(<http://www.cobra.npo-jp.net/>)を見て、積極的にご参加下さい。

(また)どうでも良い近況

名譽教授 舟 橋 國 男

またもや詰まらないお話で貴重な誌面を費やして済みません。これも幹事長の山中俊夫先生から“何か書くように”との“厳命”に依るもので何卒ご寛恕下さい。<責任転嫁の常套句>

さて、昨年の本誌には退官後1年生の興奮状態を思わず吐露してしまいましたが、2年目とも成ると少し落ち着き、晴耕雨読の真似事もそれなりにペースを掴みつつあります。耕すというほどの家庭菜園でもなく、下手な手出しで邪魔をするだけなので、アッという間に私の野良仕事は無くなり、結局は晴れた日も本を読んでいます。とは言え、退官前から書庫を増築して“書寝同室”を実践された足立孝先生には大目玉を喰らいますが、誠に些やかに積んでいた本を手にし始めている程度です。それでも、建築・都市計画への視野の幅が少しは広がりつつあるかに思い込んでいますが、興の赴くままアチコチにさ迷うだけの読書は殆ど何も残りません。<自己弁解の常套句>

そろそろ心を入れ替えて眞面目に取り組み直さねばと感じていた折から、色々な事情から、2~3の課題を考えねばならなくなりました。

その一つは、建築出身者の有志による会合で話をする機会があり、昨年暮れに“同志”的ご協力で大阪大学出版会から出版した「建築計画読本」に書いた一部を紹介したところ、偶々出席された先輩の安原秀さん(A61・ヘキサ)から、“話は分かるがまちに出よ”と指摘され、以来、元々行動力の乏しい自分がどのように生きるべきか思い悩んでいます。<悩まぬ者の常套句>

次いで、これも安原さんの紹介により、ある私学で“プロデュース”に関して極く短時間の話をする羽目になり、社会にとって意義有るものプロデュースとはどういうことか、適切な人格はどのようにして形成され得るか、プランニング・デザイン・マネジメント等との関係も含めて考え込みました。建築界ではUIAやJIAを初め学術団体である筈の建築学会もが巻き込まれて、建築教育内容・資格の国際性や、これとも関連して“技術者倫理”を問う喧しい論議も続いているが、今迄も今後も、建築教育はどのような社会と価値の形成を目指すのか、関係者自身の価値観や資質を含めて考え直すべきではないかと、改めて自責の念に駆られています。<無責任政治屋の常套句>

もう一つは、建築実務界では周知の建築基準法43条1項ただし書きに関連して、幅員4m以上の道路に2m以上接するべき要件に満たない敷地における建築の特例許可について、建築審査会に同意を求められて苦慮しております。既存住宅等の居住環境更新や転売による新築を容認せざるを得ない密集市街地における単体建築行為の集積が、再び大きな災害を齎しかねないという危機感と、一方、都市計画・防災計画に迄は踏み込み難い現行建築行政法体系の中で焦燥感に苛まれています。微々たる改善でも無策よりは益しそうから、こうした努力が一応の成果を得る迄、いつどこでも発生し得る内陸型の大地震が一日でも遅くなるよう祈るしかありません。<無信心者の常套句>

都市住宅学会で、近年増えている超高層集合住宅に関するシンポジウムがあった時、あれは散在する空き地の利活用や再生をネタにする“社会的不要悪”だとコメントしたところ、大手ゼネコンの偉いさんと議論になりました。専ら利潤追求の場に貶められた都市をどうするか、ここで詳論は出来ませんが、不適格な細街路に無理矢理建てられ続ける小住宅等を見ながら、都市計画とかアーバンデザインとか、言葉は奇麗だが空虚な内実に今更ながら呆然としています。<鈍感者の常套句>

別の研究会で、ある社会心理学者から、“「建築学」とはどこからどこまで何をするのですか”と問われたのが印象深く、何らかの答えを考えねばと改めて思っている次第です。<サボリの常套句>

■ 「MOTTAINAI」について思うこと

名誉教授 柏 原 士 郎

環境分野で初のノーベル賞を受賞した、ケニアのワンガリ・マータイ女史は今年3月の国連演説で「MOTTAINAI」とローマ字で書かれたTシャツを掲げ、地球環境の持続性を訴えたということを新聞報道で知りました。子供のころ親から良く聞かされながら、わが国ではいつの間にか死語のようになってしまったこの言葉を、遠いアフリカの環境運動家から聞かされ、目から鱗が落ちるとはまさにこのことだと思いました。もともと「勿体無い」は「物の本体を失する意」を表す仏教語で、そこから「そのものの值打ちが生かされず無駄になるのが惜しい」を意味するようになったと言うことです。わが国の政府が進めている3R運動、REDUCE、REUSE、RECYCLEの概念をこの短い言葉で見事に表していることに驚きと新鮮な魅力を感じました。

ところで、阪大で設計教育に携わっていた時に、常々何とかせねばと感じていたことがありました。若い人が「窓」について無関心で、壁で囲われた平面に、提出間際にあって適当に開口を書き込むといったことが度々見られたことでした。外部と内部を結ぶ機能を持つ窓は、建築にとって最も重要な要素の一つです。人工照明、空調などの環境制御技術の発達した時代に育った若者には、自然の光や風を建物の中に取り込むことにはあまり関心がないようです。はめ殺し窓を多用する有名建築家の作品に憧れ、無窓のトイレや行灯部屋が当たり前のマンション世代には無理からぬことかも知れません。しかし、自然の恵みである、エネルギー一杯の光や風を捨て、有限の化石燃料を大量に消費する人工照明や空調に頼ることは、本当に勿体無いことです。

このことを若い人たちに伝えようと、定年の時期になってようやく朝倉書店から「建築デザインと環境計画」を出版しました。実は、10年前に企画していたのですが、大震災直後の調査活動やその成果の出版に時間を取られ、永らく宿題となっていたものです。外部の自然の恵みを如何にして内部に取り入れるか、窓や屋根、壁、床など建築を構成する要素のデザインとの関係から、地球環境時代における設計方法を伝えようと考えました。

「勿体無い」と言えば、寿命の短いわが国の建築も大問題です。国際的にみても短く、住宅の寿命は英国の三分の一程度で、良質のストックが蓄積されている状況にはありません。建築の使い捨ては資源の浪費です。歴史的な厚みのある魅力的な環境の形成にはその長寿命化はもっと真剣に検討されるべきです。しかし、その重要性は専門家にすら充分に認識されている状況にはないようです。ある会合でゼネコンのメンバーは建築の長寿命化に反対の意見を述べました。寿命が二倍になると建設量は二分の一になり建設業が大打撃を受けるという理由です。しかし、地球規模での環境問題、エネルギー・資源問題が人類共通の課題となっている現在、発想の原点をフローからストックへとシフトさせることが最も重要だということでしょう。

「勿体無い」と思うもう一つのことは、歴史遺産ともなりうる名建築が次々と消えてゆくことです。大阪でも、竹腰健三による証券取引所はほんの一部を残して取り壊され、村野藤吾によるそごう百貨店は消滅、渡辺節による中之島の景観に欠かせない大阪ビルディングは取り壊しが決定しています。経済至上主義の中ではおそらく近い将来、吉田鉄郎による大阪中央郵便局も消滅の運命にあるように思われます。持続的な都市の魅力は、様々な時代の優れた建築に支えられていることを「MOTTAINAI」の意味をもう一度じっくりと噛みしめながら再認識したいものです。

ひとこと
名誉教授の先生からの一言メッセージ

●幸い健康に恵まれ、潜在していた読書や美術への渴望を少しずついやしながら、静かで内省的な日々を過ごすように努めています。

大学の独立行政法人化に取り組んでおられる先生方や、中高年問題に直面しておられる諸兄には、いろいろご苦労が多いこととお察し致しますが、今更申し上げる言葉もなく、ただ御健勝を祈念するばかりです。

名誉教授 五十嵐 定 義

●皆様如何お過しでしょうか。

阪大を去って早や10年以上になります。3年前に摂南大学を退職し、今、流行の起業をいたしましたが全く仕事がありません。また、最近、体のあちこちに不具合が生じ、病院通いを強いられています。これではつまらないでの、ボケ防止のため、努めて色々な会合に出席しています。先日、箕面観光ホテルで開かれた日本建築学会のシンポジウムに参加し、愚問を連発し、久し振りに英気を養いました。

現在、過去に投稿した雑文をまとめて「住まいの環境学」(青海社)という本を準備中です。

今後、シックハウスなどで注目されている「換気」に関する本を執筆できればと空元気振っています。

構築会のさらなる発展を期待しております。

名誉教授 楠崎 正也

●定年になって、間もなく十年になります。去る三月で福山大学も定年退職、四月より客員教授、構造・材料開発研究センター長を兼務し、セミ現役といった昨今です。

小生の長年にわたる鋼構造安定問題の研究に対して、昨年3月Long BeachでのSSRC(米国構造安定研究協議会)総会にて第2回Lynn.S.Beedle賞受賞、今年4月New York HiltonでのASCE構造会議総会にて第18回Shortridge Hardesty賞受賞、同5月の土木学会総会にて平成十六年度土木学会功績賞受賞の栄に浴することになりました。皆様のご支援のお陰と感謝致しております。また、同7月、名古屋国際会議場での第1回構造実験工学の高度化に関する国際会議の名誉組織委員長を務めました。

われながら、かなりの日程を消化できたと思っております。以上、まずは近況ご報告まで。

名誉教授 福本 嘴士

●2006年3月で、教職を離れますので、何か社会貢献出来ることはないかと考えたりしていますが、いやいや、かえって邪魔な存在にならないかと思ったりもしています。そこで、以前にやりたいと思っていた楽器作りを始めようと考えています。しかし、それには障害があります。使い物にならないものを作ることにかなりの投資が予想されること、どのように進めればよいかわからない事です。さて、来年に投稿依頼が来た時に、このことについて良いことが書ける自信はまったくありません。

名誉教授 脇山 廣三

●この春、大阪産業大学で客員教授に移ってから、仕事の有りようが変わってきました。もう教授会等の公的な仕事から解放されたものの、これまで通り授業や学生の卒論指導は変わらず、週2~3日の大学通いはしていますが、あの時間は自由になると思っていました。ところがどっこい、故・伊藤富雄先生のあとを受けた(財)日本地下水理化学研究所の理事長職も結構忙しく、最近「ヒートアイランドと地下水」研究会を開設したり、地盤沈下の沈静化のあとを受けて都市の新たな地下水利用のための委員会活動などもあって、すっかり思惑が外れてしまいました。体が動く間はこうあるべきなのか、と思いつつ、今日も都市における地下水の管理手法のことを考えています。

名誉教授 村岡 浩爾

環境に貢献する建築とは



生駒 芳明(A78)
(大阪市)

地球温暖化により、日本全体の平均気温はこの100年間で約1.0℃上昇している。大阪市内の平均気温をみると、100年間で約2.0℃の上昇と日本全体の平均を大きく上回っており、特に1950年代以降から気温の上昇が顕著になっている。大阪では都市部のヒートアイランド現象がますます深刻な問題であり、夏は夜になっても冷房がなければ過ごせない状況といつても過言ではない。

ヒートアイランド現象の大きな要素として、熱容量の大きいアスファルトやコンクリートなどに太陽熱が蓄えられ夜間に放出されることがある。また、気温上昇を和らげる緑地や水面などの減少、建物の空調など人工排熱の増加がある。

江戸時代には、町家は軒が深く、風の通りを意識して開口部や中庭を設け、夏場には風通しのいい建具に交換するなど自然環境といかに共生するかを念頭に考えられてきた。また、暑いときには、家の回りに打ち水をすることで涼しさを演出していた。現代の我々の都市生活を振り返ると、窓が開かず空調がないと過ごせない業務ビルであり、また、舗装が当然の道路である。あらためて古き時代の生活の知恵を思い浮かべ、自然環境と共生する持続可能なものづくりを考えなければならないと感じている。

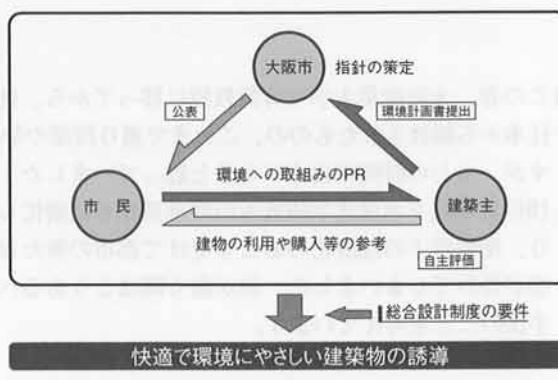
昨年夏に、国土交通省から建築物のヒートアイランド現象緩和のための設計ガイドラインが発表されたが、自然環境をいかに意識し計画するかという点で、昔の知恵に通ずるものがあり興味深く感じた。例えば、建物の南や西側の日射の影響が大きい場所においては、駐車場など広い舗装面積を避けることや中高木の配置により歩行者の日陰を確保すること、また、風の通り道を意識し建物の形状や空地の配置に工夫することなどが挙げられている。実際には十分な敷地がとれず実現が難しいのが実情だが、ものづくりの原点として忘れてはならないことと思っている。

最近では、建物の環境配慮について、建物内外の

工夫、地域性への配慮、運用管理体制をはじめ、環境性能と環境負荷を総合的に評価する手法が開発され、大阪市においても、「CASBEE 大阪」を昨年より制度化し、一定規模以上の民間建築物について環境評価を公表し誘導を行っている。環境を総合的に評価し建物を考える時代となったことは大きな前進であり、制度が発足して約1年になるが、高い評点を得る建物も増えてきており、今後、こういった環境評価が建物やそこで生活する人たちのある種のステータスとなっていくよう期待している。

また最近感じていることだが、設計、工事段階において、環境面での取り組みを総合的にリードしていく立場の技術者が現状ではまだ不在の場合が多いということである。省エネルギー化をはじめ環境配慮技術は建築、設備、維持管理のすべての領域にかかるため、計画した環境性能が、実際に施工管理されて作られ、運営段階で意図通りの効果を発揮しているかを検証するトータルのマネジメントが重要である。今後は、建築技術者が主体的に役割を果たしていかなければならない分野であると思っている。

このように、自然環境との共生を考えた先人たちの知恵を学びながら、環境時代にふさわしい建築物の様々な工夫や技術開発について、建築技術者が果すべき役割は一層大きくなっていると感じるこの頃である。



舗装におけるエコへの取組み



北川 真(C79)
(北川ヒューテック株)

今年2月の京都議定書の発効にともない、日本は2010年頃までに1990年比マイナス6%の温室効果ガス排出削減を目指すことになりました、という難しい話はさておき、都市部の夏は暑い。ヒートアイランド現象で昼も夜もとてつもなく暑い。この100年間で、日本全体の平均気温が約1°C上昇したのに対し、都市部では2~3°C上昇しているそうです。室内をエアコンでギンギンに冷やし、その熱を屋外に出すため外気温が上がるという悪循環が続きます。そして、舗装路面は直射日光を浴びて散歩中の犬が熱中症になるくらいにヒートアップします。この路面温度の上昇を何とか抑えようというのが、保水性舗装と遮熱性舗装です。また、アスファルトプラントでの混合温度を下げる中温化技術も合わせてご紹介します。

日中の気温を下げようと全国各地で「打ち水大作戦」が催されています。打ち水と同じ効果をねらうとともに、舗表面に撒いた水があまり早く蒸発しないよう、碎石間に保水力の高いグラウトをするのが保水性舗装です(図1)。実際の道路では水を手で撒くわけではありませんが、舗装路面の温度は約10°C下がります。国會議事堂の横にもこの保水性舗装がされ、朝と昼過ぎに設置されたノズ

ルから散水されます。

遮熱性舗装は舗装表面に遮熱性塗料を塗布するものです。この塗料はエポキシ系樹脂にセラミックスフィラーを混合したもので、太陽光の熱エネルギー波長域を効率よく反射して、熱を舗装内部へ伝えにくくします(図2)。既設舗装に遮熱性塗料を塗布するだけで効果を発揮するので、舗装を打ち換えずに適用することも可能です。この遮熱性舗装も路面温度を10°Cほど下げる効果があります。

そして、アスファルト混合物製造時に特殊添加剤を加えて混合温度を下げるのが中温化技術であり、これにより製造時のCO₂を削減することができます。添加剤を加えることにより、混合温度は約30°C下がり、製造時のCO₂排出量が約10%削減されます。また、アスファルト合材の舗設温度を低く抑えることで、舗設後の交通開放までの養生時間の短縮も図れます。

この「構築会たより」が皆様のお手元に届くころはもう寒さ対策が主で、クールビズからウォームビズに話題が移っていることと思いますが、ホットな夏を少しでもクールにしようと北川ヒューテック株式会社は環境対策に取組んでいます。

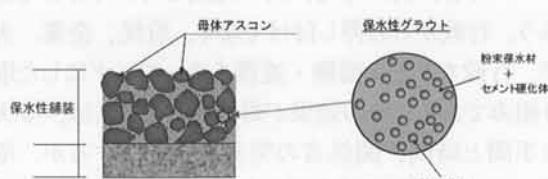


図1 保水性舗装

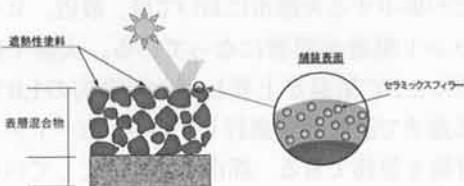


図2 遮熱性舗装

エコ時代の公共事業を考える



芝 池 利 尚(C82)
(大阪府)

今、地球規模で異常気象が多発している。あわせて、頻発する大規模な地震災害なども考えると、どうも、地球は最近体調不良であるようだ。こういった異常気象が、エネルギー浪費型の現代社会に対する警鐘、何か悲痛な地球の叫び声のように聞こえるのは私だけではないだろう。

気象庁によると、異常気象の定義は、「過去30年間の観測に比して著しい偏りを示した天候」ということになっているが、この定義が最近の気象データと合わなくなってきたとの意見もある。そのくらい、異常気象は最近頻発している。例えば、都市部におけるゲリラ的な集中豪雨も、以前は、時間雨量100ミリと聞くと、大変驚いたものだが、最近では、驚きも半減といったところである。慣れというものは恐ろしいものであるが、日ごろから危機管理意識を徹底し、油断なく、準備を怠らないようにしたいものだ。

さて、異常気象の要因は、この紙面で説明できるほど単純ではないが、地球全体から見ると、二酸化炭素やメタンなど、大気中の温室効果ガスの増大による地球温暖化が大きな要因の1つであることは、否めない。おりしも、地球温暖化防止に向け、本年2月に京都議定書が発効した。一部主要先進国が参加していないなど不十分な点もあるが、21世紀の地球の将来を決める上で、大切な一歩であると言えよう。国土(大きく言うと地球)への直接的な働きかけである公共事業の役割・責務も重い。

地球温暖化に加えて、大阪や東京など、人口や産業などが集中する大都市においては、最近、ヒートアイランド現象が顕著になっている。大阪では100年間に2.1℃気温が上昇し、全国平均の1.0℃を上回る速さで温暖化が進行している。ヒートアイランド対策も急務である。都市を覆い尽くしているアスファルトやコンクリートが全ての原因という訳ではないが、これらの材料を大量に使う公共事業も変わらなくてはならないだろう。

本論文のへこみ

例えば、今後の道路整備について考えると、透水性舗装、保水性舗装など、環境にやさしい新しい技術をさらに積極的に取り入れていくべきである。現在、コスト面で通常の舗装に比べ不利ではあるため、大阪府でもモデル事業として取り組んでいるにすぎないが、今後は、産・学・官連携のもと、課題解決に努め、都市全体に広めていくことが急務である。

さらに、これらの効果をさらに高めるためには、道路の使い方について、住民や企業、NPOなどとの連携のもと、様々な工夫をすることも大切である。大阪府では、ヒートアイランド対策の一環として、「打ち水大作戦」を実施している。「打ち水は土木技術者の仕事か?」などの意見があるかも知れないが、私は、これも立派な公共事業の1つであると考える。

また、環境面から、交通需要マネジメント施策(TDM施策)も有効な施策と言われている。大阪府でも、その導入について、様々な社会実験を実施しているが、なかなか根付いていない。私が現在出向している市においても、駅周辺での一方通行化の導入をめぐって、一部地元住民の反対により、社会実験さえもできない状況にある。やはり、車社会になれた住民にとって、車の利用を制限するTDM施策の導入はかなりの抵抗を感じるようであるが、1つでも多くの実績を積み上げることが必要だ。

まさに、エコ時代の公共事業とは、公共施設を住民や企業に単に提供するだけでなく、その使い方についても、共に考え、共に実践していくことであろう。行政からの押し付けでなく、府民、企業、大学、行政などとの協働・連携をキーワードにした取り組みである。その効果が得られるまでには、多大な手間と時間、関係者の努力を必要とするが、危機に瀕する地球環境を思うと、私たちに残された時間はそう多くはない、と考える今日この頃である。

工コ時代における 建築環境設備関連の技術開発



樋口 祥明 (A83)
(株)竹中工務店

大学を卒業して早や20年以上になる。博士課程に進学後、芝浦工業大学に1年間在籍したため、入社は遅かったが、1年間の大坂での新社員時代を経て、技術研究所に配属されて15年以上があつという間に過ぎていった。その間、空調・換気に関する研究開発と、福岡・名古屋・札幌ドームを代表に多くのプロジェクトの温熱環境計画を支援してきた。今思い返すと、90年代前半はバブルの名残もあり、アメニティーやより積極的な快適性を追求する研究開発が行われていた。90年代半ば以降、バブルの崩壊とともに、イニシャルコスト削減やランニングコスト削減に起因する省エネルギーを目指す研究開発が増えてきた。90年代後半から2000年代にかけては、地球環境という大命題が与えられ、より省エネルギーな、また資源循環を考慮する研究開発が求められてきている。

ゼネコンで環境設備に関する研究開発に携わっていると、デザイン重視の建築計画がなされ、構造的な検討がなされた上で、設備システムで室内の環境スペックを満足させる設計が要求されるというシチュエーションに遭遇することが多々ある。そのような状況の中で、省エネルギーを実現できる設備システムの研究開発（吹出口、吸込口の最適配置や、居住域空調など）を行ってきた。しかし、地球環境的な配慮を重視することを考えいくと、建物の室内環境形成は、まず建物そのものでなされることが望ましいと考えている。その意味では、建築本来の環境形成がどのようになされたかという「計画原論」の基本に立ち戻り、建物そのもので、居住者にとってできる限り快適な環境を提供できる技術の研究開発が必要と考えている。光を取り込む、風を取り込む、日射熱を

取り込む、余計な熱を入れない、室内で発生する熱や汚染物を排除するなど、昔から建物で自然に行われてきた環境調整機能を、現在の建物の中に上手く取り込んで行く必要がある。例えば、縁側などの緩衝空間の存在、障子・雨戸など自由に開閉することで屋内と屋外の関係を可変できる建物外皮、土壁のように調湿性があったり熱容量が大きい材料の利用、打ち水などの行動など、いろいろな考え方が現在にも応用できるように思われる。実際、保水性舗装や、屋根散水システム、ソーラーチューブ、クールチューブなどが開発され、建物に適用される例も増えてきている。

近年、建築以外の分野で利用されるべく、様々な機能性材料が開発されてきている。これらの材料を建築分野に適用していくことで、建材に新たな機能を持たせることも可能と思われる。我々環境設備関連の研究開発に携わるものとしては、異分野の新たな情報を常にウォッチしながら、建築分野への適用をにらんでいくことが、今後ますます重要になるような気がしている。さらに、新しい材料の探索だけではなく、環境工学的な視点を持つ者が建物を構築する構工法にも目を向けて研究開発をするべきだということを感じる。ゼネコンに勤務して研究開発をしていると、特に景気が悪くなってくると、コストによって良いものが採用されない局面に直面することも多い。建物そのもので環境調整を行うための良い建材や部材構成を開発したとしても、なかなか実際の建物に採用されないこともあります。建物が完成するまでには、多くの材料をアセンブリして、多くの職種の人たちが携わることになる。そのような建築施工の過程の中で、施工の手間をいかに減らした構工

法を考えるかが、コストダウンや工期短縮に大きく寄与することもある。これまで、構工法が建築分野の研究として、注目される場面は多くなかったようだ。しかし、環境配慮した建物をより多く世の中に提供していくためばかりでなく、施工の過程で発生する廃棄物をより少なくするという観点でも、構工法の研究がもっと行われるべきではないかと考えている。

建築で環境調整を行うことの重要性を述べてきたが、便利で快適な環境に慣れた我々が生活するには、やはり建築設備での補助をしていくことは避けられないだろう。その点では、より省エネルギーな設備システムを研究開発することも必要なことである。設備システムの設計は、必要な設備容量を計算し、安全率を考えた上で設備資機材の選定をしていくという手順を踏む。しかし、四季折々、気象条件が大きく変動する日本においては、選定された機器の能力を発揮することは1年のうちほとんどない場合が多い。設備機器は最大能力で動かない時には、その運転効率が下ることが多い。時々刻々変動する条件に応じて、機器の運転効率を下げないで運用できるシステム設計の重要性が増しているし、それが可能な設備システムや機器の研究開発が重要になってきている。

また、設備機器が最大能力で動かないときに、室内の気流分布が変化する、除湿能力が低下するなど、室内環境が変わることに十分配慮した設計を行うことや、その設計に対応した技術開発を行うことも重要である。

最近、「環境デザイン」という言葉を耳にすることが増えている。また、「CASBEE」という環境性能評価システムが国土交通省主導で開発され、名古屋、大阪、横浜などでは自治体版での評価が一定規模以上の建物では義務付けられ始めている。今年は東京で「SB(サステナブル・ビルディング)05」という国際会議が開催され、国内外から非常に多くの参加者が環境に関して考え、討議する機会もあった。環境設備に携わってきた者以外にも、環境に対する意識が広がりつつあることは間違いない

が、この流れを絶やさないことが重要である。建築に関わる一人一人が、自分のできる範囲で環境に良いことを一つでも実践していくことに加えて、建築に関わっていない人にも、環境に優しい建物で過ごすことの気持ちよさを訴えていく必要があるようだ。さらに、国や行政機関においても、「CASBEE」などの環境性能評価などで高く評価される建物にインセンティブが与えられるような社会的な仕組み作りを行ってもらうことにも期待したい。最後に、より質の高い室内環境を、地球に優しく創り、優しく使う建物を提供できるような研究開発を、私自身が今後も続けていこうと思っている。

エコに強い土木建築



原 口 和 靖(C88)
(関西電力株)

「エコ時代の土木建築」というテーマで何か書けないかとお話をいただいた。私が社有地の転用にかかる土壤汚染調査に携わっていたことから白羽の矢がたったようだが、残念ながら携わったのはほんの1年、しかも現在は異動してしまっているから、あまりたいそうなことは書けそうにない。

しかし、ふと見渡してみると周りには意外に素材の多いことに気づき、つい引き受けてしまった。以下、私の見聞の狭さゆえ、勤務先である関西電力に話が偏ることをご容赦願いたい。

話を土壤汚染に戻すが、当社では土壤汚染問題は、「土壤」＝「土木」という単純な発想にもとづき?、土木部門で取り組んできていたのであるが、土壤汚染対策法の施行、会社の資産圧縮の動きにより、今さらながら一躍脚光を浴びることとなった。

ここで、ある先輩土木技術者(我が校の先輩でもある)がたくましさを見せる。関西では土壤汚染対策に関してあまり実績のないことに目をつけ、これまでの経験を生かして新会社の立ち上げに挑んだのである。新会社は、「洗浄」技術と「熱処理」技術を組み合わせ、97%のリサイクル率を達成する汚染土壤の浄化技術を柱に、調査・分析などのコンサルティングサービスから浄化土の販売までのトータルソリューションを提供する。時代の要請と自分のキャリアを見事に調和させたのである。

この他にも、水力保守の経験を生かし、ダムの流木をチップ等の畜産資材として再生、この使い終わった畜産資材をさらに有機土壤改良材として地域の野菜栽培に活用し、資源循環と地域共生を実現する会社を立ち上げた先輩土木技術者もいる。

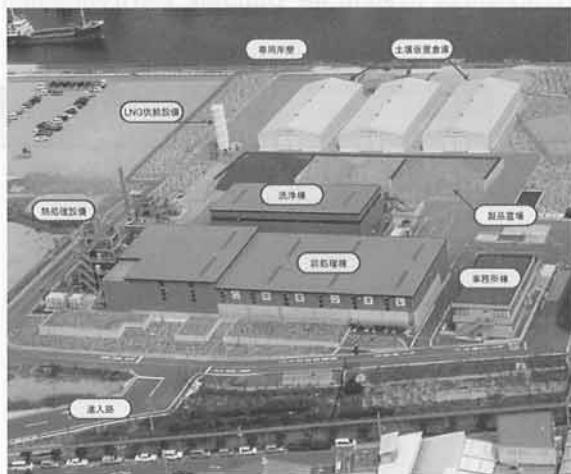
ところで、関西電力では、毎年環境対策に関するレポートを出している。このレポートの2005年版に紹介されている「エコ・ビジネスの展開」で前述の2社を含む関係会社5社が紹介されているが、実にこのすべての会社において土木建築技術

者が活躍しているのである。

話は新規事業に偏ってしまったが、なにも起業にこだわる必要はない。事業化は新しいニーズに応えるためのひとつの形であって、事業化にはまた別の困難さがある。現にエコをうたっていたものの整理に追い込まれた会社も複数ある。

会社には、まだまだ石炭灰の有効活用、風力発電に取り組むメンバーもいるし、水力発電のリフレッシュ、会社の地球環境保全の中心的役割を果たしている原子力発電の安定供給に携わるメンバーも当然会社のエコに大いに貢献していることになる。開発などエコと対局にいると思われがちな土木建築であるが、どっこいなかなかの優等生ぶりではないか。そもそも自然相手は得意なのだ。

時代が望むものに的確に対応する。それが、市民生活の基盤を整備する土木建築の役割ではないかと考える。その1つが今は「エコ」だということ。ガソリンを入れて「これも一つのエコです。」なんてCMがあるくらいだ。時代は変わる、人も変わる、当然土木建築に望まれるものも変わってくるのである。肩肘張らずに時代の声を聞こう。



関電ジオレの浄化プラント

エコ時代の建築の一例紹介



高山 真 (A89)
(株)日建設計

1. 一口でエコといっても

当然のように聞こえるテーマ、“エコ時代の土木・建築”を頂戴しました。よくよく考えると範囲が広く、普遍的で、非常に難しいお題です。あまり考えすぎても筆が進まないので、できるだけ“さらっと”記させていただきます。もちろん、これだけではありません。一部をご紹介したに過ぎません。

2. 日常ワークの中で

私は建築設計会社に勤め、設備設計を担当しています。私たちがかわる、環境に係る主な法律に建築基準法・環境基本法(騒音・振動・水質汚濁他)・省エネ法・ビル管法があります。ここ数年間に、シックハウス対策(=建築基準法)が追加され、省エネ計画(=省エネ法)が強化されました。特に省エネ法の改正はCOP3京都議定書でのいわゆる“6%削減約束”を守るために行われてきたものです。

一部自治体では建築のサステナビリティを推進する目的でCASBEE(=Comprehensive Assessment System for Building Environmental

Efficiency=建築物総合環境性能評価システム)が指導に盛り込まれました(図1)。「建築物の環境品質・性能(=生活アメニティ)」と「建築物の外部環境負荷(=負の環境影響)」を軸にして建物を評価するもので、単に省エネ法のPAL/CECなどのように基準値(目標値)を守ればよいというものではありません。CASBEEによる評価結果は、確認申請に合わせて提出を求められ公表されます。これにより、クライアント、利用者、もしくは第三者が環境性能という点から建物を評価し、この評価が市場原理に組み込まれ、“エコ時代”にふさわしい良質な建築が増える…、ことを目指しているわけです。設計者のワークが増えることを除けばよいシステムだと思っています。

また、クライアントとのやり取りでも省エネ・省資源(=省コスト)だけではなく、環境問題は大きなポイントとなりました。先述のCASBEEを利用しながら協議をすることも多くなりました。

ただ、正直、もう少し早く整備が進み、また、われわれを含めた皆の意識改革できていればという気もします。

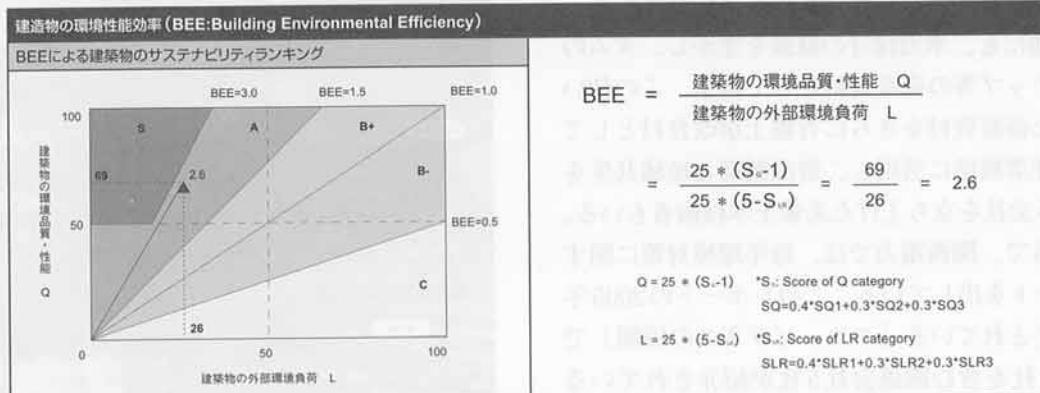


図1 CASBEE評価 (Q : 建築物の環境品質・性能とL : 建築物の外部環境負荷の比で建物を評価する)

3. 実際の建物の例

これまで、いくつか今回のテーマに合った建物の設計に携わることができました。ここでは2002年4月にオープンした「京都市環境保全センター・京エコロジーセンター（以下、エコロジーセンター）」という延べ床面積2,700m²程度の施設をダイジェスト的にご紹介します。

エコロジーセンターは、1997年に京都で開催された「気候変動枠組条約第3回締約国会議（COP3）」を記念して建設された環境学習のための施設です。基本構想段階から市民、NGO、学識経験者、京都市がワークショップを立ち上げ、設計チームが加わって議論を重ね、施設の計画が進められました。この計画意図から、建築物そのもの、運営そのものが環境負荷低減のモデルととらえ、環境負荷低減の仕組みを目に見える形として表現することに務めました。



図2 建築物俯瞰写真

ワークショップは昨今、公共建築では普通に取り入れられている手法ですが、当時、私にとって初めてのことでのことで、いろいろな立場の人が、非常に積極的に自分の意見を述べることに驚きをました。

(1) 環境負荷低減手法について

施設の透視図に採用した手法を載せたものを図3に示します。

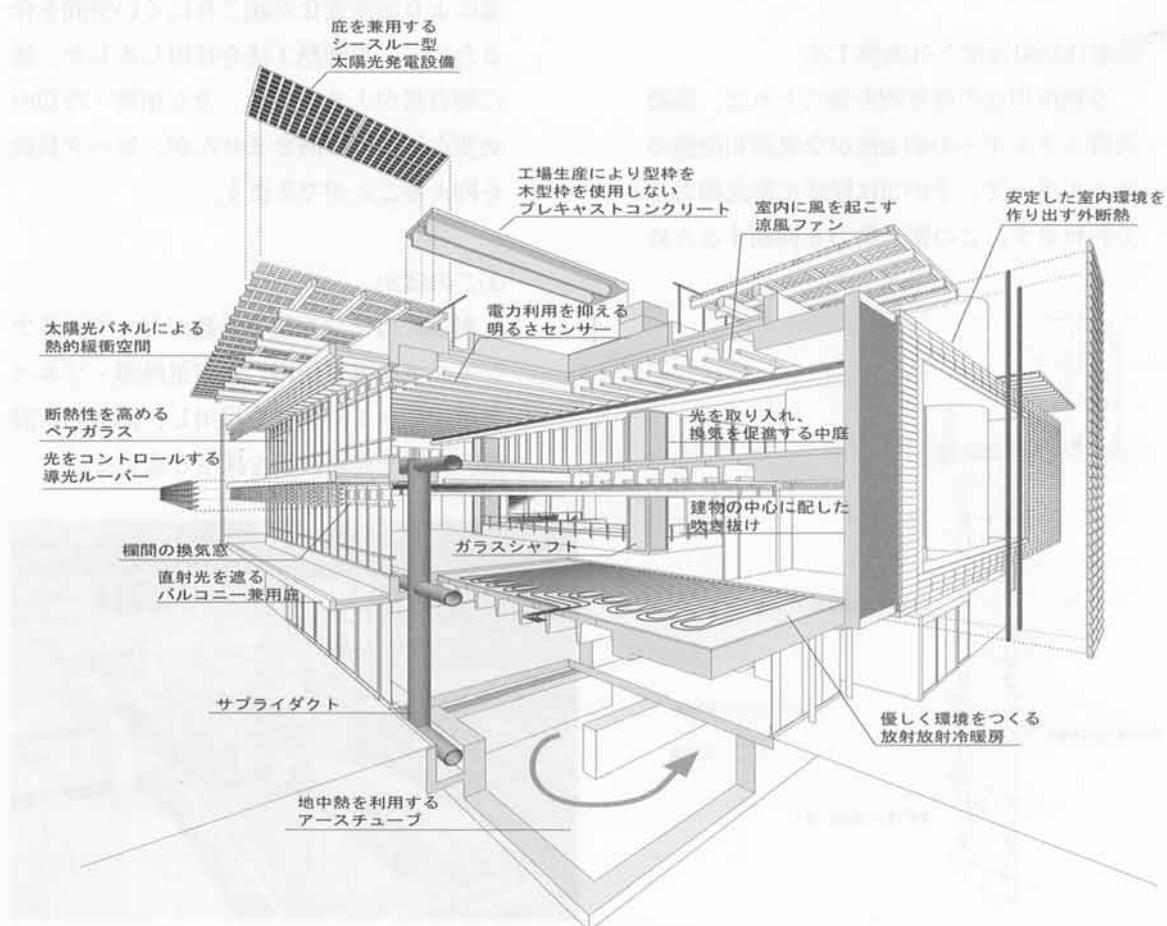


図3 環境負荷低減手法

①自然採光と日射しゃ蔽

本施設では、省エネ建築の基本に則り、東西面の開口を減らして庇・ルーバーで囲い、南北面での採光面を大きく採っています。外ルーバーはメンテナンスが不要な固定式とし、特殊な三角形断面により太陽高度が高い夏期には遮光しながら、太陽高度が低い冬期には室内天井面に導光するライトシェルフとなります。

②地中熱を利用するアースチューブの計画

外気負荷を低減するため、構造二重ピットを経由させることによって予冷(予熱)した外気を室内に取り入れています。単純なものではありますが、竣工後1年の実測結果によれば、冷房時にはおよそ外気負荷の10%、暖房時には21%のエネルギーを削減できています。

③軸体放射冷房と外断熱工法

事務所用途の建築物を例にとれば、施設消費エネルギーの約40%が空気調和設備のエネルギーで、その30%程度が搬送動力と云われます。この搬送動力を抑制するため

に採用したのが軸体を使った放射冷暖房と外断熱工法です。

一般的な空調方式では、熱源で作られた冷温水をポンプで空調機に運び、熱交換機を介して送風機により空調空気を室に送り出します。放射冷暖房では、温水循環式の床暖房と同じく軸体に埋設した配管に冷温水を通して、外気導入分をのぞいて、直接室内に冷温熱を運び、ファン動力の抑制を図りました。

二次的なメリットとして、床に直接冷温水を導入することから、冷温水温度を緩和し熱源の運転効率を向上させることも可能です。

また、エアコンによるコールドドラフトの心配がなく、放射環境を守り、ファンによる気流により室内温度を緩和し、快適な空間を作り出します。軸体に直接熱を導入することから、熱ロスを抑え、軸体の熱容量により温度変化が起こりにくい空間を作るために、外断熱工法を採用しました。逆に熱容量が大きいため、急な加熱・冷却の必要な用途には向きませんが、ピーク負荷を抑えることができます。

④このほか

熱源にはオゾン破壊係数がゼロであるアンモニア冷媒を使用した空気熱源・ソルエア併用ヒートポンプを採用し、雨水利用設備、太陽光発電設備を採用しました。

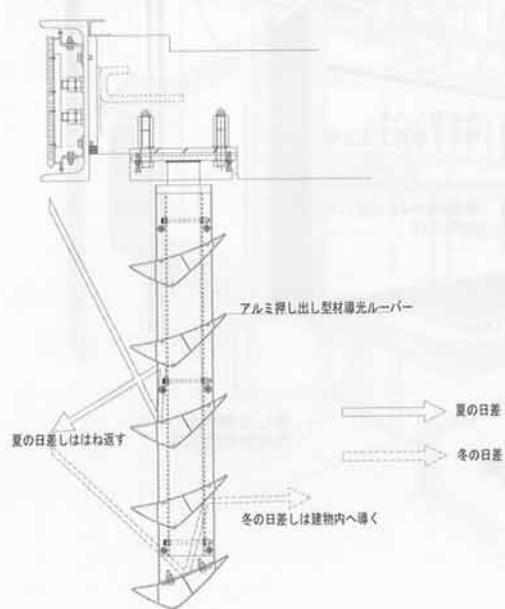


図4 導光ルーバー



図5 クールチューブ（施工中）

また、珪藻土やサイザル麻、木製サッシュなどの天然材料、再生木材、廃ガラス再生プロックなどの再生材などを多く採用するなどしたことも特徴です。

(2) 運用結果

施設は開館3年を過ぎましたが、ボランティア、NGO、職員の皆さんを中心となって、よりよい施設運営を目指して努力されており、日々の運用状況、エネルギー使用状況を記録しています。図10に施設の運用エネルギーを示します。エコロジーセンターには、消費エネルギーの大きな展示施設が含まれ、いろいろな活動のため、運用時間も長いのですが、庁舎や学校よりも面積

あたりの消費エネルギーは小さくなっています。

4. おわりに

“エコ時代の建築”がテーマということで、エコロジーセンターで採用した環境負荷低減手法の紹介をしました。先述のとおり、エコロジーセンターのような環境意識が非常に高い方々に出会うことができ、失礼な言い方かもしれませんのが、怖い反面(つい先日も、施設の設備計画について鋭い質問が飛んできました。)非常に頼もしい感じを受けました。

このような方々が増え、こちらもオープンマインドをもって、よりよい建物を計画して行きたいと思っています。

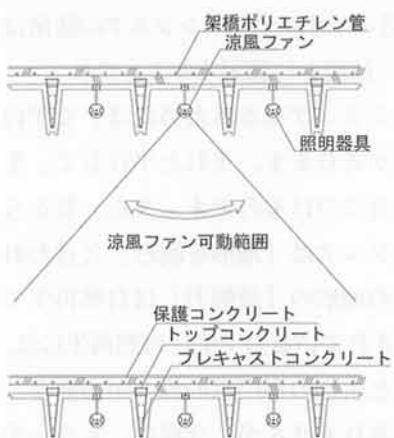


図6 車体放射冷暖房のしくみ

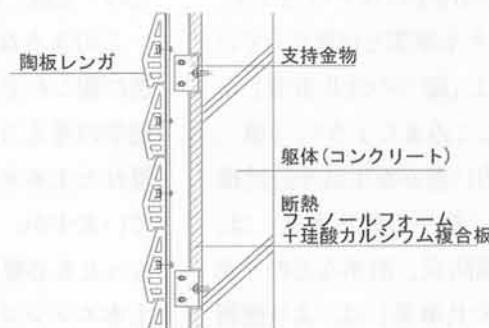


図7 外断熱概念図



図8 施工時写真



図9 展示用サンプル

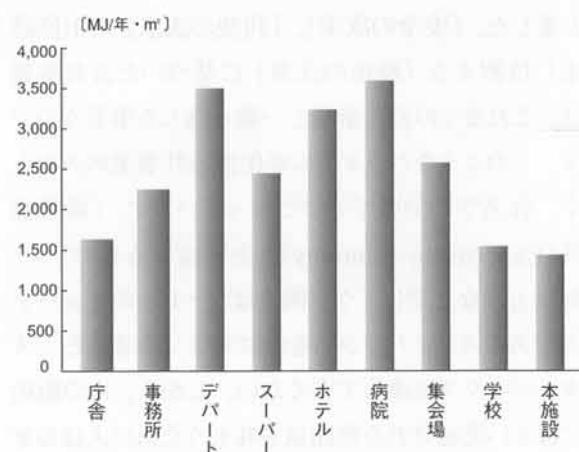


図10 施設消費エネルギーの用途別比較
※省エネルギーセンター“ビルの省エネガイドブック”

自然再生:土木の進化が問われている!



中 村 圭 吾(C94)
(独)土木研究所

自然再生(restoration)は、もともと科学用語で、修復あるいは復元とも訳されます。自然再生は「かく乱を被った生態系を、かく乱前の状態にごく近い状態にまで回復させること」¹⁾と定義されています。私の専門の水環境分野では、1990年の多自然型川づくり、1997年の環境を目的とした河川法の改正、2003年の自然再生推進法などによって、自然再生の動きがますます活発になってきています。

じつは、自然再生を担うのは多くの場合、土木エンジニアです。したがって、土木技術と土木エンジニアのレベルアップが自然再生には不可欠です。私は自然再生がこれまでの土木事業とは異なっていると考えています。ここでは「第三の公共事業」という概念を導入して検討してみましょう²⁾。「第三の公共事業」とは、精神的に豊かな生活や自然環境のための公共事業です。「第一の公共事業」は、最低限の公共事業で、地震防災、治水などの「安全」が目的です。「第二の公共事業」は、より便利で物質的に豊かな生活・産業活動のために必要な道路開発、水資源開発などの「利便」が目的です。それに次ぐ公共事業を「第三の公共事業」と定義しました。「安全の欲求」、「利便の欲求」の上位欲求に位置する「環境の欲求」に基づいた公共事業は、これまでの公共事業と一線を画した事業なのです。このようなパラダイム変化は公共事業のみならず、経済学の分野でもはじまっています。「経験経済(Experience economy)」と呼ばれるものです。経験とはなんでしょう？例えばコーヒーのチェーン店であるスターバックスを例に考えてみると、スターバックスは決して安くない、しかし、あの他店にはない洗練された雰囲気を味わうために人はお金を出すのです。そこには「経験」したい何かがある

のです。第三の公共事業も同じです。周りの自然を見回せば子供の頃にあった魚がたくさんいる川、気持ちのいい森は生活する場の近くから消えてしまいました。好奇心が満たされる川、気持ちが癒される森、そのような自然を「経験」したいという気持ちが第三の公共事業を支える原動力です。味わってみたい（経験したい）と思わせる環境を保全する、あるいは復元することが「第三の公共事業」の目的であり、人々はそこにお金（税金）をかけてもいいと考え始めているのです。土木エンジニアの使命はその「人情」を「技術」に翻訳することです。

このようなエンジニアになるためには、まず自然に親しむ必要があります。それと平行して、生態学の考え方を身につけるのです。また、昔から優れた土木エンジニアは「地形を読む」と言われていますが、この地形の「読み解き力」は自然再生でもっとも必要とされている力です。自然再生には、土木エンジニアと生物の専門家の協力が必要なことは言うまでもありませんが、今後は、もう一步踏み込んで、この両方を理解する人が重要となります。実際、各地の大学では土木工学科の先生に生物の専門家を招聘して学生を教育しています。今後は、生態学の講座に土木エンジニアを入れることも必要でしょう。教育システムも、修士号は土木工学で、博士号は生態学で、などといったことが出来るように大学も改変していく必要があります。

最後に私が関わっている霞ヶ浦の湖岸再生を簡単に紹介します³⁾。ここでは、減少する水辺植生帯を再生するために、行政、NPOに加えて生態学、河川工学、海岸工学、地形学の専門家らが加わって計画を立てました。場の歴史・地形を把握

し、工学的な知見を活用しながら、使用材料にも極力配慮しました。なかでも生態学者の提案による湖底に眠る植物の種子を使用したシードバンクによる植生帶の回復では、一切植物を植えずに多様な湖岸植生帶を再生できました。なかには30年ぶりに霞ヶ浦に蘇ったものもありました。自然のポテンシャルを活かした好例です。

自然再生を成功させるためには土木分野の進化が不可欠です。あなたも自然再生に取り組んでみませんか？



コンクリート護岸(左:施工中)がシードバンクを活用した自然再生により、短期間に緑豊かな湖岸となった(右)

ストックでありつつ フローである建築の可能性



高草 大次郎(A95)
(高草大次郎建築設計事務所)

建設業界にとって、環境問題というのは実に頭の痛い問題です。

二酸化炭素排出量が「全産業の1/4」と最も多いのが建設産業であるという事実を考えれば、建設産業全体として早急に対応しなければならない問題であり、また、建設行為とは少なからず土地を改変し、天然資源やエネルギーを消費するという行為である以上、突き詰めて考えれば、建設行為自体を縮小していかなければならないという結論に至ってしまいます。

実際に昨今では、新築に代わって「リノベーション」や「コンバージョン」など、改築によって建築を再生させていこうという動向や、新築とする場合でも建築の長寿命化を計り、用途や機能が不全になった場合に解体・改築によって建築を使い続けていこうという考え方が建築産業での主流となっています。

これらはすべて建築に対する認識が、従来型のスクラップアンドビルトという「フローとしての建築」から、「ストックとしての建築」へと移行しつつあるからといえるでしょう。

一方で、昨今の日本の経済状況をみれば、首都圏を中心とした地価の上昇に伴い、眠っていた遊休地や定期借地権付き土地の見直しや、ファンドを対象とした再開発計画等、建設を巡る資本の流れは多様となり、建設業界にはよりスピーディーな対応を迫られているのも事実です。また、海外資本の日本経済への溢入や国内での企業買収合戦による資本の再編成を考えれば、建築や土地の所有者の頻繁なる交代によって、建築のデザインや用途だけでなく、土地自体の利用方法にも、より劇的な変化が求められています。

つまり、今建設業界に求められるのは、環境の観点からみた「ストック型」、かつ、経済の観点からみた「フロー型」の産業なのではないでしょうか。

この二律背反の要求に対してどう答えるか、それが今我々に突き付けられた課題ともいえるでしょう。この課題に対しては、「ストックでありつつフローである」建築というものが存在すれば良いのですが、「ストック」と「フロー」という従来の言葉の意味に捕われていては、この自己矛盾を含んだ命題に応えることはいささか困難でしょう。そこでこの二つの言葉を再考してみる必要が生じます。前述した「リノベーション」や「コンバージョン」という考え方は、「不動産」としての土地に建つ建築そのものを「ストック」として扱っているのですが、その目的が建築の構造体の転用によって構造部材を新たに作りだす資源とエネルギーを節約することであるならば、構造部材そのものを「ストック」として扱うことができればほぼ同じような効果が得られるはずです。また「フロー」とは土地や建築の「流動産」化を意味し、それに伴う建築部材やエネルギーという資源の消費を抑えることができれば、環境問題にも十分応え得ると言えるでしょう。これらを考えあわせ、長寿命な構造部材の開発と、それを転用して建設・解体・移設が容易にできるシステムを確立することができれば、「ストックでありつつフローである」建築が可能になるわけです。

上記のようなシステムを実現すべく、現在、建築工学部門の中塚信助教授、鈴木毅助教授、山中俊夫助教授、及び各研究室の学生と共に現在共同研究を進めており、「REPC」と名付けられたその

研究会では「PCリ・ブロックユースシステム」の開発を行っています。これは乾式接合によるプレキャストコンクリートブロック(アンボンド型PcaPC部材)を主要構造体とする建築の移築・転用システムで、プレキャストコンクリートが高耐久・長寿命であることと、プレストレスの解放・再導入によって容易に建設・解体・移設が可能であることを考えあわせて考案したシステムです。このように、構造部材を解体によって廃棄することなく転用し、建築自体は状況に応じてスピーディーに改変していくシステムはすでにいくつかのゼネコンによって鉄骨造にて考案されていますし、また元来日本の伝統建築においては木造にて行われていた手法ですが、我々はプレキャストコンクリートにて研究を進めています。これは工場製作されるプレキャストコンクリートが鉄骨や木造に比べて圧倒的な高強度、高耐久性、長寿命にことができるからであり、またコンクリートの蓄熱性や防音性の高さをうまく利用すれば環境的にも高性能な建築とできると考えたからです。問題はその単位重量の大きさですが、部材

を小さなサイクロ状のピースで作ることを基本とすることで個々の部材重量を鉄骨レベルにまで引き下げるこによって対処しています。また通常湿式を併用して行われるプレキャストコンクリート部材同士の接合を、完全な乾式とするための材料、構法の開発も行っています。さらにその構造体の生産と運用が一つのビジネスフローとして成立するために必要なマネジメントストラクチャーの研究も進めています。現在試設計によってその有用性の実証を行っている段階ですが、いずれ期待できる結果が得られるのではないかと思っています。

建築が文化の一役を担い、経済活動の最終目的であった時代は終焉を迎え、建築こそが新たな産業を生み出し、さらには勃興しつつある産業の母体となる時代に突入しています。

こんな時代にあってこそ、建築家に求められる資質とはいったい何なのでしょうか。

私はその答えとして、時代の要請に即応する柔軟な思考をもつこと、そのような意識で設計活動に励みたいと思っています。

《卒業50年》 半世紀を経て

杉木 清(C55)



「もはや戦後ではない」といわれた昭和30年に卒業し、50年になる。また、戦争の跡があちらこちらに残っていた。電力会社に入社、面接の折、「構築」とは戦争中の陣地構築を思い出すといわれた。「築土構木」からとったと聞いていると答えると、試験官は、江戸時代「土木奉行」というのがあった、阪大工学部はユニークな名前が多いと感心されたのを覚えている。現在、国勢調査分類、「その他、幼児、老人」に入って5年になる。

最初の仕事は和歌山県の小さな水力発電所の建設。当時、セメント一袋の価格と土工の日当は同じくらいであった。まだ、セメント・鉄筋等の資材は貴重な時代で、できるだけそれらを節約するような設計が求められた。工事管理も鉄筋の切れ端や、セメント袋の綴じ紐を数え、使用量を日報に記入していた。小さい発電所であったが、それだけに水力発電所の全体がよくわかった。次いで、大水力「黒四」の建設に転勤した。規模が大きく、そのごく一部を担当しただけであるが、日々進んでいく工事を目の当たりにして、臨場感を味わい、現場体験があとあと役に立ったように思う。

その後コンサルタントとして、国内や主に東南アジアの水力開発の仕事に携わった。高度成長時代は、資材と人件費のウエイトが逆転し、機械化が進み設計・施工も大きく変わってきた。海外のプロジェクトでは、契約・積算基準も国内と異なり、評価に困った。IMF体制の崩壊による為替レートの変動が激しく、プロジェクト開発には、技術の他、その国の経済と事業主体の両面からの経済評価が問われ、経済の勉強もさせられた。

高度成長の挫折以来、ダムや公共投資の評判はいたって悪くなつたが、社会のインフラとして必要なことは変わらない。水力にしても、国内では新たな開発余地はほとんどないが、世界的には、開発可能な包蔵水力の30%も開発されていない。新しい技術と開発理念で、日本の技術や資本が国際的に役立つことを願いたい。また、たとえば、濁水の長期化問題を解決し、推砂で埋まっているダムを、きれいな水やもとの有効貯水量に甦らせる技術が現れることを期待したい。

四ツ橋にあった電気科学館の未来コーナーに、戦前、波形だけ見えるブラウン管が展示されていた。およそ20年後にカラーTVが出現、新幹線、高速道路、四国架橋、青函トンネル等、夢といわれたものが、話題に上がってからほぼ20年で実現されてきている。最近は世の中が複雑で、なかなか方向性を見出しが難しい。が、どうも、なんでもより自由で透明な方向へと向かっているように見える。コンクリートに例えると、社会のスランプはだんだん大きくなり、ものごとの剪断抵抗と内部摩擦角はだんだん小さくなっているように思える。どうかなあとも思うが、しかし、Cやφが小さくなることは、反面、活動の場が広がることがかもしれない。夢の実現はハードに限ったことではない。構築会の名簿を見ると、今や会員総数四千人以上で心強い限りである。育てていただいたお礼を申し上げるとともに、構築会の隆盛を祝し、現役の皆様方のご活躍、ご健闘を祈ります。

《卒業50年》
こんな家に住みたいナ！

荒木 兵一郎(A55)



孫と一緒にお風呂に入ったとき、「おじいちゃんのお風呂は露天風呂でいいネ」という。なぜかと問うと、「お星様が見えるから」と言う。孫の住んでいるマンションの風呂場は窓がなく、換気扇を回し続けないとカビが生えたり臭いがこもったりするが、僅かでも窓があると、太陽の光がさんさんと降り注ぐし、風や雨なども感じられて気持ちがいいらしい。

また先日、竜田川のほとりに建つ友人の家を尋ねて玄関の扉を開けたとき、和室越しに流水に映える紅葉が目に飛び込んできた。思わず「オー」と叫んでしまった。周辺環境との調和を大切にしていることが、すぐに分かった。そして家の内外はすべて同一レベルで水平である。便所や浴室、バルコニーまでもである。これだけ水平にするには隠れたところに綿密な配慮を必要とする。とくに排水が困難であるが、見事に解決している。上下足の履き替えも腰掛けてできるようにしてあり、申し分がない。さらに猫を飼っているが、猫用の水洗トイレまである。奥さんが車いすを使用しているので、そのことを第一に考えて建築家に設計してもらったとのことである。

私の学生のころに教えられた住まいづくりは、地震や台風などに対して丈夫に安全につくること、日照や通風を調節して夏は涼しく、冬も暖かく過ごせるようにすること、さらに見た目に美しく芸術的につくることが主題であった。この考え方の代表は、2DKアパートである。狭いながらも便利に住めるように工夫が加えられている。しかし、これは元気な若い家族が対象であり、それも過半数の人たちが住みやすければいいということで、平均値が重視された。ところがこの平均値を重視すると、平均値から外れればはずれるほど、その住宅では暮らしにくくなるわけで、とりわけ能力が未発達だったり、低下したりした人たちに、しわ寄せがなされる。

とくに台所が使いにくい。炊事作業は能率ばかりが重視され、若い人が立って作業する高さになっている。それも壁に向かって箱型に組み込まれ固定されている。小学生に皿洗いをさせようとしても、水道のカランに手が届かない。大人がひねってやって、皿洗いが始まると腕から足先までがずぶぬれになる。しつけのために、無理に洗わせようとすると、いすか踏み台のようなものを作らなければならぬ。

高齢者の場合も同じである。背中や腰が曲がってくるし、関節も磨り減って身長は壮年期より10センチほど低くなる。したがって、調理台の高さは作業する人の身長にあわせて調節できるようにする必要がある。そのうえ、立ちっぱなしの長時間作業は苦になる。できれば、いすに座ってやりたい。それも壁に向かって作業すると、「わたし作る人、あなた食べる人」の関係になる。簡単な料理を作るときは、これでもいいが、工夫を凝らしたり、手が込んだりする場合はみんなで話し合いながら作りたい。

それにはシステムキッチンで対面式に配置されているのがいい。認知症のお年寄りもキャンプに連れ出すと、餅は搗くは、そばも打つ。家では鍋は焦がすし、包丁だけがもする。それがみんなで囲んで作業をすると、餅を搗くことでもできるし、すき焼きもできる。ある認知症の施設を訪れたとき、みんなでテ

一フルを囲んでお好み焼きを作ってくれた。それもビールを飲んで、歌を唄いながらである。この光景は今も忘れることがない。

できれば、調理台の横には大きなテーブルも欲しい。子どもたちは親に見守られながら宿題ができるし、おやじも新聞を広げて読んだり書き物をしたりできる。何よりもいいことは大勢のお客さんを招いて、賑やかにパーティができることがある。

こんな夢と野心と陰謀を抱いて、日々、平穏に暮らしている。

《卒業40年》

良き師、良き朋(とも)、良き同窓

島 田 壮八郎(C65)



大阪大学入学が1961年、この頃は高度成長少し前の段階であったが、国土整備の芽生えがそこそこにあり「黒部ダム」、「東海道新幹線」、「高速道路」などの取り掛りの時代であった。阪大土木を目指したのはこのような社会情勢と物を作ることへの興味でもあった。当時から工学部では学科ごとの志望で、土木建築の総合した構築が対象となった。今では誰も信用せず、我々61年入学のものしか知っていないが、この年の工学部の合格最低点は医学部を上回っていたことを45年近く経った今、後輩諸氏にも老いの縁言としてお伝えする。

4年生になって講座は室田教授の研究室を希望した。先生はその少し前に前任の田中教授が亡くなられ、40才前の教授で非常に厳しい方であった。以後修士課程、卒業後もご厄介になったが、卒業後は我々卒業生を一人前の社会人として扱って頂いたことは有り難いことであった。お亡くなりになる前に工学部の同窓会である「大阪大学工業会」の会長に就任され、少しばかりのお手伝いをさせていただいたのが、ご恩返しであつただろうか？

修士課程になった頃に小松先生、前田先生、毛利先生、樋木先生が来られ伊藤先生ともにお世話になったが、学問の面ではなく言いたいことを聞いていただいたと思っている。安宅先生が退官されたのは卒業の年であったか？樋木先生以外の先生方は既にお亡くなりになっている。樋木先生長生きして下さい。

修士修了後は旧運輸省に進んだ。航空局に配属されたが、航空局から阪大的教授になられた末森先生が時々見えられたが、知識が無かったため当初失礼をしたかも知れず申し訳なく思っている。

航空局に決まった時、室田先生から「航空局だから飛行機貸は只だろう」といわれて喜んでいたら、そんな甘い話があるわけもなく出張に航空機を使わせて貰ったのはずっと後の話しだった。

公務員としては、航空局、港湾技術研究所、内閣官房（防災担当）、宮崎港事務所、関西空港調査室、運輸経済研究センターなど2年に一度の割合で転勤したが、同級の西村君の計らいで、「今までの公務員経験を学生に話せ」と機会を作って頂いた。あれやこれや雑多に話しさせて貰ったが、項目の絞込みが足らず不出来であったかもしれない。それでも母校で話すことができたのも同級のよしみと感謝している。

昭和40年(1965年)土木コースを卒業した者は24人、5年毎に集まりを行っている。滝田君、林君、西村君に会のお世話をやって頂いていたが、62年に関西に帰ってきたのを機に同級のお世話をさせて頂いている。アメリカ在住の山田(哲)君が来阪すれば必ず声をかけると、少なければ3人、多ければ10数人が集まり、また、岩田君の最終講義後のパーティには10人を超える同級生が集まった。(林君の時は長岡と遠かった為ご免なさい。)今も現役で活躍している者も多いが、集まれば常に40年前と同様に呑み、食べ、かつ語り合うのが常である。

関西に帰ってきてから、阪大工業会、構築会などのお手伝いをさせて頂いている。特に昭和34年・35年の卒業生が中心になって始められた「二水会」(以前金山先輩に構築会便りにご紹介して頂いている)は、偶数月の第2水曜と年6回の頻度で20年に亘って開催されているが、その世話係りから幹事を勤めさせて貰った。震災直後の平成7年2月の会は、流石に案内を出すのが困難になり、「中止したい」と言ったところ、金山先輩が「僕が案内するから」とやって頂いた。会が中断することにならず、感謝している。

このような集まりを通じて、先輩、後輩の方々と触れ合うことができ、人の繋がりも増え、若い方々には人を紹介できるなど少しはお役に立たせて頂いているのではないかと感謝している。

良き師、良き朋(とも)、良き同窓！阪大で過ごせたことに感謝！

《卒業30年》

卒業30年会 “FOREVER YOUNG!”を開催して

前田 敏(C75)



今年の5月28日(土)にホテル京阪ユニバーサルシティでC75の30年会同窓会を開催しました。ご来賓の先生方は、榎木先生、村岡先生、松井保先生、西村先生、松井繁之先生、中辻先生、出口先生、常田先生の8名でした。新田先生は残念ながら東京での会議が長引き、ご欠席となりました。富士川幹事長の下に幹事団で色々と準備した出し物も交え、佃君の名司会の下で約2時間半歓談し、最後は恒例の奥野君のエールと寮歌で幕引きとしました。先生方をお送りした後、勢いのついたおじさん達は、すぐ近くのレストランで2次会。加古藤君のクラリネットと富士川君の変わった形のアコースティックギターのBGMの中で大いに気勢を上げました。何のことではない、いつもの喧騒の中でしたが、最後はそれまでややおとなしかった中谷君が仕切り役で何かをまとめようとしていました。

さてさて、その後は宿泊先としたホテル京阪の一部屋に集まりまして、真面目な仕事で一次会に来れなかった本井君も、常田先生にいただいた吟醸酒とありつけのお酒でまたまた盛り上がって1時半頃にやっとお開きとなりました。

翌日は、ゴルフ組と大阪湾クルージング組に分かれ、それぞれ日頃のストレスを解消すべく、OBを打ったり、クルーザーの中でお酒を飲んでくだをまいたりの1日を過ごし、無事解散と相成りました。先生方をはじめ、同窓生のみなさま、大変お疲れさまでした。

ところが、あとで考えますに、誰一人USJに行かなかったようで、大阪市さんをはじめ関係者の方々のご叱責を蒙りそうで、反響が大変恐ろしいのですが、今後の話のネタに余計なことも書かせていただくことにしました。

ちなみに私は別の日でしたが、USJは女房と行きまして、ジュラシックパークやターミネーター、バットトゥザフューチャーなど大変楽しませていただきましたので、申し添えます。

今回は、約44名の対象者の内、28名の参加となりました。好評でしたが、同窓生が持っていた在学当時の写真の紹介で、幹事長がみんなから集めたものを上手にアレンジしてパワーポイントで見せてくれました。谷本君のアドリブ入りの写真説明で先生方にも大変受けまして、卒業生の企画での成長振りが評価されました。

この同窓会、土木では5年毎に開催し、C75期生は10年ごとの会に先生方にご来賓頂いております。20年会は大野屋旅館の迎賓館(新入生コンパを開催した場所)、10年会は新阪急ホテルでした。やはり年を取ると企画にも熱が入るようですが、次の40年会はどうなりますことやら…

松井繁之先生のお話の中には40年会になるとリタイヤしている人が多く、名刺交換が必要とのことでした。



《卒業30年》 turning point

家 倉 泉(A75)



卒業後10年、20年と寄稿させていただきましたが、また10年経ってしまいました。今までに諸先輩の書かれたお便りを読ませていただきますと、卒業後20年から30年の10年間で、かなりの方が人生の転機を迎えたようですが、ほんとに思いもよらず、私にも転機が巡って参りました。あまり参考にならないかも知れませんが少し書かせていただきます。

卒業後20年の年が丁度阪神大震災の年で、その時の寄稿にも若干心境の変化が現れていましたが、卒業後26年にしてビジネスの最先端でがむしゃらに働く企業戦士から、ダウンシフター(セミ(ハーフ?)リタイア、スローライフ等とも呼ばれていますが)へと、人生の残った時間を大切に、心豊かに生きる暮らしを求め転換いたしました。

辞めた当日は本当に夢の中にいる様で現実感が無く、何ヶ月も前から手続きをして、はっきりと事態を認識していたにもかかわらず、卒業後20年の時には想像もしていなかった事が現実となり、喪失感をかなり感じました。幸いこれに関しては、専門学校と私大で非常勤講師(私大の方は、脇山先生～広瀬氏ルートで話があり、巽先輩が以前担当されていた授業で、竹嶋先生も在職されている学校です)をしたり、事務所を開いてメーカー等の技術的な相談に乗ると(後述の理由で1/3ぐらいの稼動率が精一杯ですが)すぐにこんな人生の方がいいなと思うようになりました。

辞めた要因は色々ありますが、まずは震災でしょうか。それまでは自信満々でしたが、人の無力さ、はかなさが身に染みました。次には、景気の後退に伴ういっそうの効率～利益第一主義の進展、中央集中～地方の衰退(中京、東海地方は別のようですが)、でしょうか。以前の大坂の建設業界には、おおらかさや自由さ、泥臭さ、言葉では言い表せない大阪らしさが有ったと思います。それがだんだんと金太郎飴化して、どこを切っても、東京の顔が出てくるようで息苦しさを感じていました。

他には、大阪には仕事が無いというのも有りました。USJの竣工後なかなか次の物件が出てこず、東京へ単身赴任の可能性が段々高くなってきたなと言う感じがしていたのですが、先輩諸兄もよく書かれている親の高齢化の問題が有り、単身赴任は少し苦しい状況でした。そこへきて、その当時(今もですかね?)流行っていた早期退職優遇制度の締切りが近づき、辞めるなら今かなと言う状態でした。

親の高齢化の問題に関しては、辞めた当初2年間はのんびり暮らしましたが、夫婦双方の両親の平均年齢が82歳となった今では、年々医者にかかる頻度が増加して4名それぞれの病院巡りに忙しくなり、自分が医者に行く暇がなかなか無いぐらいで(こっちもさすがに50歳を超えてから若い頃の無理の付けが出てきて、老々介護的な感じもしますが)辞めてなければどうなっていたのだろうと思うようになりました。

物質的な豊かさから心の豊かさへ、などとカッコをつけていますが、やはり経済的には苦しいところがあり、いろんな方に御心配をおかけしましたが、贅沢さえしなければ、今のところ何とかやっていけるのではと考えています。そのおかげで、物を大事にするようになり、生活がエコライフ化してきました(と言っても、元の暮らしと時間が金で買う様な所が有りましたので(物質的には世間一般より質素でしたが)、エネルギーの消費量は、アメリカほどでは有りませんが、まだまだ、地球にやさしくないかも?)。但し、マクロ経済スライド年金改正は予定外でしたし、健保制度、介護保険制度もどんどん改正されていきますので、さらに10年後はどうなっていることやら?

今年は卒業後30周年と言う事で、他の学年の様に記念行事をとも思いましたが、まとまりず、例年通りのクラス会となりました。



た。すみません。

今年のクラス会の写真です(今年の欠席者に関しては、去年の写真を入れて置きましたが、長町恵三、薦谷博、田中均一、砂川(明石)ひとみ各氏の写真は撮り忘れました。)最近御見限りの、森崎、広瀬、田附、奥井、江上各氏、その他の方も、お待ちしておりますのでまた、いらっしゃい～！

それでは、また、10年後。

《卒業20年》 卒業後20年を経過して

玉井昌宏(C85)



大学卒業後20年、大学に入学してなんと4半世紀近い時間が経ってしまいました。当方はと言えば、相変わらず北千里に通っております。学部4年で室田研に配属されましたが、樋木研の後野先生のおられた建設系A棟1階の研究室おりました。部屋の真ん中あたりにおかれた長机を、現鹿島の内田典男君や佐藤工業の服部悦士君、さらに、その前年に福井大学に移られて、しばしば泊まりこみて学生指導に来られていた福原先生とも共用しておりました。若干占有スペースは拡大しましたが、今も当時とほとんど同じ場所に陣取っているわけで、同期や先輩諸氏が来室されれば、20年の時が止まったような光景に出会えるというわけです。なんともお恥ずかしいような心持ちになります。

学内で多少の人事異動を経験しましたが、長らく同じような場所に勤務しておりますと、いくら事情に疎い当方でも、大学や学科、そして人々の気質の変化といったものを観察することになります。同窓生諸氏から「阪大土木って今どうなっているの?」というお尋ねをしばしば受けるのですが、多方面からお叱りを受けることを覚悟して、この質問に対する当方なりの答えを、最近の活動と併せて愚痴っぽく?お知らせしたいと思います。

1998年の変革は、土木工学科にとっても、当方にとっても一大事でした。建設系の4学科が統合され、地球総合工学科という定員160名の大学科に再編されるとともに、学部組織を持たない独立専攻である地球総合工学専攻が発足しました。18歳人口増加に対応するために臨時に増員された教官ポストの吸收という意図もありましたが、細分化された学問分野の総合化(学部教育内容の共通化と専門教育の後回し)という理念があったはずです。新しい組織の名称がそのことをよく表しています。独立専攻に移動した当方にとりましては、この理念をいかに実現するのかが最大の課題でした。「学問分野の総合化というのは、種々の細分化された専門分野の人々が集まつても達成されることなく、研究者個人が総合化する以外には実現しない」という大阪府大の森岡正博先生の考え方と共に、技術者倫理、環境経済、大気環境、河川生態系等々、学生の求めに応じて研究領域を拡大させました。多少、発散気味であったことは認めざるを得ません。後継者に恵まれず休止状態になっている研究もありますが、いくつかは小さいながら成果を得つつあります。なかでも、大気研究を選んだ院生2人が気象予報士の試験に合格し、その1人が気象庁に入ったことは嬉しい出来事でした。環境経済については、前期課程に「地球環境の経済

学」(現在は、「公共事業と環境の経済学」に名称変更)を開講し、他専攻から多くの受講生を得ています。「国土の均衡ある発展」と「経済効率性の重視」との調和については、当方の専門である河川分野、とりわけ今後の治水計画を考えるにあたって重要課題なのです。受講生にはこのことを理解して欲しいと思っています。

自分なりの「総合化」が結実しない間に、本年4月に独立行政法人化によりまして、次の改革が到来しました。工学研究科の従来の専攻が7つの大専攻に再編されました。大学院レベルでも、教育研究の垣根を低くすることが求められています。名称は残りましたが、独立専攻は事実上解散し、当方は出戻りとなりました。大学科、大専攻、大講座と見かけは変わりましたが、あらゆる意味で土木は以前のままでです。ですから、今度は、出戻った組織の中で、いかなる教育研究分野に自らの職責を見いだしていくべきかという点について、土木の将来像とともに思案中です。

さて、独法化により、自治は無くなりました。自治の時代、自ら掲げたはずの改革の理念で打ち破ることのできなったセクショナリズムという壁を、独法化は見事に打ち破ってしまうのでしょうか?「恐れず、怯まず」の改革は、大学にも着実に浸透しつつあります。ただ、こうなってしまっては、期待と不安とともに成り行きを傍観する以外にはないと思えてしまうのです。

末筆ながら構築会会員の皆様の益々のご発展を祈念しております。

《卒業20年》 卒業20年にあたり

杉 本 正 三(A85)



今夏、約16年ぶりに同窓会を企画し開催した。卒業して4年目に神戸・舞子で同窓会を開いて以来の全国の同期卒業生並びに同期入学生による同窓会である。

開催に当たっては、16年ぶりということで、講座毎にサブ幹事をお願いし、同窓生の行方の確認にまず取り掛かった。

昨今は、インターネットを公私に渡って活用している方がほとんどで、電子メールでサブ幹事や同窓生と連絡でき、昔に比べれば格段の違いを改めて痛感し、この10数年の社会の進歩に驚くばかりである。調査の結果、同窓生45人の内43名までの行方は判明したが、残念ながら、兼松博君と竹田正吾君の行方が分からぬままである(行方をご存知の方は、ご連絡いただければ幸いです)。同窓会への参加者は18名と、期待に反し少なく思ったが、卒業以来の再会の方もいて、働き盛りで公私共に多忙の年代にしてはますますと思う。

同窓会は、昔話や近況など大いに盛り上がった。卒業後、転職した方、事業を起こした方や私の20年に比べ大いに経験を積まれた方などと本音で話ができる、大いに刺激を受け、有意義であった。今後は定期的に同窓会を開催し、同業・異業種・発注者・設計者・施工者・行政・営業など、色々な分野・立場の人との情報交換の場になり、出席者が多くなることを期待したい。次回開催(2年後)と継続開催を約して同窓会を閉会した。今回参加できなかつた方、次

回はよろしく。

さて、卒業して20年を少し振り返ってみたい。私は大学院に2年お世話になったので、社会人としては18年目であるが、定年60年とすれば社会人人生の折り返しを過ぎた。私は子供の頃からの夢(多くの人に喜んでもらえる建物を作る)を実現することが出来ると信じて電鉄会社に入社した。その頃はバブル景気の始まりの頃であったため、私の会社も、バブルに乗り大規模開発を手がけ人手不足もあり、経験の少ない私が会社の本社社屋の建設現場に一人常駐し、周りに支えられながら完成までタッチできたことが私の現在の基礎になった事は間違いない。バブル後は、次の景気上昇までの繋ぎとして、低利用大規模用地を短期回収型事業(ゴルフ練習場や住宅展示場など)として整備する仕事を任せられた。また、今秋完成した兵庫県芸術文化センターを核とした複合ビルの計画にも参画したが、阪神大震災により計画は頓挫し、芸術文化センターのみが出来上がった。震災後、被災を受けた施設の復旧に奮闘している中に、震災でダメージを受けた会社の組織リストラの一環で部署が解散になり、技術者の機能が子会社の設計事務所に移管されたのを機に私もその会社に出向となった。初めの8年は発注者として、出向後は受託者・設計監理者として建築と向き合い、後半の10年は数多くの物件に関与することが出来た。この20年、夢の実現もいくらか出来たがまだ満足できていない。また、関与した建物が解体されてなくなったものも多数あり、寂しい思いもした。

折り返した社会人人生後半戦は、どのような人生を送るのだろうか。建築から離れ、新しい夢が必要になるかもしれないが、夢の実現に向けて、有意義だったと思えるように頑張りたい。

(追記) 去る10月20日に、同期生・田川敏之君がご逝去されました。心よりご冥福をお祈りいたします。



《卒業10年》 私の課題

荒木進歩(C95)



卒業して10年がたった。卒業したのは数年前のことのように思われる。卒業後、引き続き5年も学生をしていたのでそう感じるのかもしれない。さらに、その後も同じ研究室に通い続けている。あまり変化のない10年だったかもしれないが、この10年を振り返って(反省して)みたいと思う。

卒業後1~2年目(大学院博士前期課程)、研究室にも慣れてくるとともに、同期の学生ともより親しくなり、サッカーの市民大会などにも参加した。大学生らしさ(?)を感じ、楽しいときだった。

卒業後3~4年目(大学院博士後期課程)、研究室には同期生がいなくなり□数が減ったが、後輩の学生に仲良く遊んでもらえた。ヨコだけでなく、タテのつながりも大切だと感じた。この時期は自由に勉強、研究する時間が豊富にあったはずだが、それを有効に生かせず、今になって後悔している。

卒業後5年目(大学院博士後期課程の最終年)、自分の研究は停滞気味で、投げ遣りにもなったが、年度の後半はとにかく必死になって論文を書いた。論文の出来は別として、よく頑張ったという点では自分を褒めてやりたい。

卒業6年目(勤務1年目)、前年までの「学生」から立場が180度変わったことに違和感を感じた。特に、年度末に卒業生が開催してくれる謝恩会に「招待」(?)してもらったのは複雑な気持ちだった。大学での仕事については、授業や大学の業務をこなしながら「研究」を行うことの大変さを身にしみて感じた。また、会議のときに飛び交う単語の意味が全く分からず苦労した。翌年には慣れるだろうと楽観視していた。

卒業7~8年目(勤務2~3年目)、授業や大学の業務をこなしながら「研究」の時間を確保する術は相変わらず会得できず、また、会議のときに飛び交う単語の意味も相変わらず分からなかった。全く成長していない自分を情けなく思う。

卒業9年目(勤務4年目)、ひとつの転機が訪れた。全面的に頼りにしていた川崎浩司先生(C特)が留学することになり、ようやく「自分でやる」という自覚が出てきたように思う。「最初から、ちゃんとやれよ!」と自分を責めたくなる。

卒業10年(勤務5年目)、授業の担当コマ数が増え、今まで以上に「研究」の時間を確保することが難しくなってきた。その上、私を含む一部の教員には任期が定められ、研究成果をあげなければ(もちろん、研究だけの評価ではないはずだが)先が見えなくなるおそれも出てきた。お尻に火がついたと思っている。

どうやら(明らかに?)私の課題は「自分から積極的に」ということのようだ。教育、研究を「自分から積極的に」行い、少しでも社会の役に立てるよう努めたいと思う。社会のニーズを見誤らないように、皆様方との交流の場にも「積極的に」参加したいと思う。

学生からの たより



「広場なんて不要？」

建築工学専攻
博士後期課程2年

田中康裕 (AO1)

大学生活を通して、色々な（大学関係者以外の）方々と出会うことがある。例えば、研究調査がきっかけで知り合う地域の方や、喫茶店の経営者。特に最近では、大学から近いこともあり、千里ニュータウンに住んでおられる方々と知り合う機会が多い。

入居から約40年、少子高齢化、建物の老朽化、近隣センターの空き店舗などの課題を抱える千里ニュータウンは、今ではオールドタウンと呼ばれることがあるが、実際にニュータウン内に足を踏み入れると、成長した緑の豊かさに驚かされる。この千里ニュータウンで、たくさんの魅力的な方々—小学生から高齢者まで、地域活動をされている方、主婦、色々な技能を持っておられる方—に出会った。

このような方との間で、最近立て続けに話題になった2つの広場のことを書きたい。

1つ目の広場は、千里中央地区の再開発—公民館



写真1



写真3

の建替え、大型商業施設と高層マンションの建設など——に伴い、失われようとしている広場である（写真1）。もちろん、イベント的に利用されることが多い広場や、各地の物産展などの催しがよく行われる商業施設的な性格を持つ広場など、千里中央地区にはこの広場以外にもいくつかの広場がある。ただし、今失われようとしている広場は、イベントでも商業でもない、地域に住んでいる人が（誰かに許可を得なくても）自由に使える広場であり、地域の集まりの中から生まれた映画上映会実行委員会が街頭宣伝を行ったこともある（写真2）。このような、まさしくパブリックな性格をもつ広場が、今失われようとしている。

もう1つの広場は、千里ニュータウン内にある近隣センター前の広場であり、数年前までは、暴走族のたまり場になっていた、そんな広場である。しかし、4年前に近隣センターにある場所がオープンして以降、この広場は、ある時には地域の人々が集まる場所として（写真3）、またある時には子どもたちの遊び場として（写真4）、地域の中で重要な役割を担うようになった。この広場が、ある建設会社の現場事務所のための駐車場になるという事件が起こった。ただし、こちら



写真2



写真4

の駐車場騒ぎについてはあっさりと（？）解決して、今ではこれまでのように使われている。

このような2つの広場に関する話題が立て続けに起ったために、広場に関して考えさせられることがあった。商業的に利用価値のない（つまり、お金にならない）広場なんて不要だと考えている人がいるのではないか？、と。そんなことを考えていた時に目にとまつた文章を引用したい。

○日本の都市は中央主導の都市計画の下で、しだいに土地と建物と通過路としての道路とイベントから成る都市——疑似都市——になりつつある。

○都市の主役が建物や道路ではなく、それらによって作られる外部空間だとしたら、都市という社会的共通資本は消費の対象としてのサービスを生み出す資本ではないはずである。都市はその外部空間によって人々の生活に形を与え、生活の質を規定していく一方で、こんどは都市の外部空間は人々の生活によって独特の形態を与えられる。そして空間と生活の相互作用によって「場所」が形成される

（閻宮陽介「都市の形成」・宇沢弘文、茂木愛一郎編『社会的共通資本』東京大学出版会 1994年）

パブリックな場所とは？広場とは？このような問いは、いわゆる建築(building)の枠には收まりきらない、広がりのある問い合わせかもしれない。しかし、このような問い合わせを、建築(Architecture)に関わる学科の中ではなければ、他に誰がするのか？という思いもある。



「ランニングハイ」



土木工学専攻
博士前期課程2年
田力弘道 (C04)

乱文にて失礼いたします。

環境、特に水質に関する研究がしたいと考え、現在の研究室のドアを叩いて2年半が経過しました。学部4年時は、研究室の雰囲気や専門的な講義内容など全

てが新鮮で、卒業研究も個人的には楽しんで取り組むことができたと思っています。そして大学院に進学。1年目は講義と就職活動で瞬く間に過ぎ、ようやく研究の面白さの端の部分がわかりかけてきたのが2年目の夏、そして残すところあと半年です。目下の課題は修士論文ですが、完璧とまではいかないまでも、後悔だけはしないようにと、今は自分に発破をかけています。

さて、私の所属する大阪大学の吹田キャンパスは万博記念公園と隣り合っており、その外周道路に沿うようにして、自転車・歩行者専用道路が一周約8kmにわたって整備されています。息が切れるか切れない程度の心拍（最も脂肪燃焼効率が良いとされている）で走ると、ランニングの所要時間はおよそ45分。有酸素運動は30分以上続けるのが理想とされているので、まさに理想的なコースと言えます。更に、景色も最高です。工学部を出発し、医学部前の並木道を抜けてモノレール駅を越えたあたりから外周道路にはいります。時計回りに進むと、モノレールのレーンが万博競技場まで沿うようににはしっており、ときに、その車両が静かな音をたてながら頭上を追い越してゆきます。競技場を過ぎると「くるくるプラザ」と呼ばれる吹田市のリサイクルセンターが目に入ります。工学部食堂の使い捨て割り箸はここで処理されているそうです。中環道路と中国自動車道を橋下に眺めながら更に進むと、万博記念公園・エキスポランドのアトラクションの横にやってきます。最近は少々元気（活気？）がない様子ですが、夕暮れ時には観覧車がライトアップされ、本当に綺麗です。外周道路周辺には街灯が少ないため、夜間の走行は多少危険ではあるのですが、一方で観覧車の魅力を引き立たせる効果を発揮しているようです。

私の他にも老若男女の健脚達が思い思いのペースで走っています。時には、私の所属する学科の先生の姿を目撃できますし、先日も他学科の知人が3人連れて走っているところにばったり出くわしました。また、この道路は下校途中の学生やロードバイクに乗ったおじさんなど自転車の交通量も少なくないのですが、およそ5mと十分に確保された道幅のおかげで全く快調に走ることができます。一人よりも二人ということで、最近では研究

室の同期を運動不足の解消と称して無理矢理に連れ出して走っています。最初は嫌がっていた連中もだんだん味をしめてきたらしく、「毎週月曜日はランニングの日」になりつつあります。こうなったらしめたものです。研究の合間の気分転換にもなるので、卒業までこれを続けて、あわよくば、来年の春にハーフマラソンにでもエントリーしてみようなどと目論んでいます。

近況を自由に書いてよいとのことだったので、本当に好き勝手書いてしまいましたが、もし誰かがこれを読んで万博ランナーが増えれば、個人的には、「してやったり」だと思っています。

「学び多き大学生活」

建築工学専攻
博士前期課程2年

井垣圭二 (AO4)



私は大学院博士前期課程2年次工学研究科、建築工学を専攻し、耐震工学を研究しております。

建築業界はまだまだ氷河期と言われる厳しい就職状況ですが、2008年問題と言われる団塊の世代が一斉に退職することに対して多くの企業が年々採用人数を増やしており、なんとか私も予てより希望しておりました建築会社に内定をいたいただくことができました。

現在は卒業に向けて修士論文の研究に追われる日々を送っております。いつどのような特性で発生するか予測が困難な地震に対して建築構造物を守るために制御装置によりアクティブに制御力を発生させて建築構造物の揺れを制御する制震理論の研究開発を行っております。現段階では、本システムの実用化までには実験的検証などさまざまな課題は残っているものの、実現に向けて少しでも力となればと研究に没頭しております。

学業に専念する傍ら、学生としての貴重であり自由に満ちた期間に仲間とともに多くのことに挑戦しました。

アルバイトで貯めたお金をなんとかやり繰りし、世界の建築物をこの目で見たい、体感したいとの思いからパリ、ニューヨーク、シドニー、香港など世界の都

市を旅しました。多様な文化を学び、国籍を超えた様々な人々と触れ合うことができたように思います。

また大学入学当初、友人の勧めでスキューバダイビングを始め、すぐさま海の美しさに魅了され、「人生陸だけじゃない」を合言葉に多くの気の良い仲間と触れ合い、自然の取り分け海の雄大さに感銘を受けました。しかし温暖化の影響で地球規模での海面上昇やさまざまな要因でさんご礁が死滅するなど美しい海の生態系に徐々に変化が現れております。いかにこの素晴らしい海（地球）を維持し守っていくか考えていかなければと強く感じております。

これまで建築業で行っていた手法、壊しては作るというスクラップ&ビルトを今後も行っていては環境的にも資源的にも限界があるように思います。大変難しいことではありますが我々の世代は、いかに環境にやさしくかつ建築業界がより良く発展していくかを模索していかねばならないと思います。

これから社会で働いていくにあたり、地震への不安を取り除き安心して生活できるような建物を作り上げていくとともに、日本という枠に留まることなく世界で活躍できる人間としてこのような環境問題に取り組んでいければと考えております。



「チョコレートの一つや二つ…」

社会基盤工学コース
博士前期課程1年

神本祐一 (C05)



「近頃の阪大生の等身大の姿を…」ということで、今回何と私が「構築会たより」に寄稿させていただけたことになりました。私は「近頃の阪大生」を代表できるような男ではないと思いますが、等身大の文章力で書かせていただこうと思います。

私は現在博士前期課程の1年です。出口一郎先生のご指導のもと、海浜変形の研究を行っています。二ヶ月に一度は泊りがけで海へ出かけて、測量機器を持って浜辺を走り回ったり、穴を掘ったり、GPSを背負っ

て歩いたりしています。一年を通じて最も過酷なのは冬の実測です。スタッフを持って冷たい海に入り、地形の変化を調べます。また、新米の4回生には実測から帰ってから、採取してきた大量の砂をひたすらふるいにかけて、粒径の分布を調べるという世にも恐ろしい作業が待っています。実験棟の奥まった暗い場所から「シャカシャカ」という無機質な音が聞こえたら、「お、働いているな」とごく稀に通りかかる先輩方に気付いてもらえます。知力よりも体力勝負な部分が大きい現地実測です。ところが真っ先に海パン姿になって海へと向かうのは御年56歳の出口先生で、私たちはいつも遅れをとるまいと必死です。研究室では、測量結果を整理したり、気象データを集めたりといった作業に追われます。研究の最終目標は「海浜変形の正確な予測を可能にする」ことであり、既存のプログラムを改良することになります。といっても私はその辺りは勉強不足でこれから大いに励まなくてはなりません。研究内容について書けることがこの程度で、先生にお叱りを受けそうです。

大阪大学に入学してからもう5年目を迎えて、仲間たちの間でもついに就職の話題がでてくるようになりました。私は中国地方の片田舎から出てきた人間で、今となっては誰一人信じてくれる人はいませんし、私も信じられないくらいですが、小学生の頃は近所で「神童」と騒がれ、中・高時代は秀才で通っており、年に一度のバレンタインデーには下駄箱にチョコレートの一つや二つ入っているような男でした。そのため入学当初は少しばかり自信を持って大阪に乗り込んで来ました。そして即座に打ちのめされました。友達や先輩方は皆、頭の回転が速く、知識も豊富で、努力家で、人間的にも尊敬できる方ばかりで、とても太刀打ちできませんでした。5年目の今も太刀打ちできない状態が続いています。しかしながら私はそれがとても刺激的です。「この人たちに負けたくない、ずっとこの人たちに相手にされる人間でありたい」と思わせてくれることが、私を成長させていると思います。素晴らしい環境で生活できていると実感しています。学食で夕食を食べる時間すら、仲間と居ると鋭い指摘や突拍子もない意見が聞けたりして刺激的な時間になりました。

す。しかし今の仲間と使える時間はあと1年程になってしましました。社会に出てからは、今度は「我輩は阪大生」という自信を打ちのめされることになるでしょう。さらなる刺激を求めて頑張りたいと感じます。そして情熱を注げる仕事に就きたいです。真っ先に海パン姿になって海へと向かうあの出口先生のように…。さらに女性社員からチョコレートの一つや二つ貰えるような社会人になりたいです。数年先のことを熱く語ってしまい、先生にお叱りを受けそうです。恥ずかしくない修士論文を仕上げるべく勉強に勤します。



「研究室改装」

建築工学コース
博士前期課程1年

西口純子 (A05)

私の所属研究室があるS1棟は、工学部の中でもかなり老朽化が進んだ建物だと思う。床のタイルははがれてくるし、階段の手摺は壊れているし、エレベーターには閉ボタンがなく、扉を手で押さえていないとショッちゅう挟まれてしまう。壁には阪神淡路大震災のとき出来たひび割れがあり、改修前にまた大地震がきたらその時は諦めるしかないと建築の教授も太鼓判を押すほどだから、ますます不安になる。大学内では現在、老朽化した建物の改修工事が順次進められているが、S1棟に工事の順番が回ってくるのはまだまだ先らしく、それまでに大地震が来ないよう祈るばかりだ。

そんな古いS1棟だけど、小さな改修はよく行われている。トイレを広く綺麗にしたり、ベンキを塗ったり、床を一部張り替えたり…。先日、5講座(建築・都市人間工学領域)でも私達M1を中心となり研究室の改装を行った。本棚を少し移動したり、壁の一部にベンキを塗ったりなどは以前もやっていたそうだけど、今回のような全面的なレイアウト変更は十数年ぶりらしい。

以前のレイアウトでは、席と席の間が狭く、座っているとお互いの背中がぶつかったり、間を人が通れなくなったりしていた。また研究室を分断するように中

央に本棚があり、光が入らないし、風通しや見通しが悪い。通路部分が多く、荷物置き場になっているスペースなど、無駄な空間が多くあった。よし、ここは私達が頑張って快適な研究室にしよう！ということで、皆の希望を聞いてみた。予算は10万円。最初は皆シャワー室が欲しい！とか言っていたけれど（シャワー室が出来たら研究室に住めるだろうなあ）、結局、個人スペースを広くし、収納を増やし、4回生スペースを確保、台所を綺麗に、ということで落ち着いた。一応建築工学科なので、動線や動作寸法なども考えて皆でレイアウトを検討。とにかく広く・明るく！

改装は金曜の夕方から日曜の夜までかかった。その間、研究室は大地震の後のようすごい惨状に…。本棚を移動させるために出した本が床を埋め尽くし、天井からはLANケーブルが垂れ下がり、金属カッターが火花を散らしている。一番ひどかったのは埃で、本や棚に厚く積もった埃がもうもうと部屋中に舞って、アスベストじゃないけど肺病になるかも…と思ったほど。あわててマスクをつけたけど、帰りにはマスクの外側が真っ黒になっていた。皆が粉塵マスク・軍手、エプロンやらつなぎやらを着て作業してる姿は結構笑えた。

三日間夜遅くまで頑張った甲斐あって研究室は広く・明るくなった。今まで狭い狭いと思ってたけど、5講座ってこんなに広かったんだ…と感動。月曜になり、研究室に来る人来る人、その変わり様に皆びっくりした顔で入ってきて、その反応を見るのがまた楽しかった。

でもやっぱり三日では全部の改装は終わらなくて、実はまだ台所と暗室の整理が残っている。今週の金・土はまたマスク・軍手・つなぎで頑張ります。



「大学生活を振り返って」
土木工学科4年
菅 直子



振り返れば、大学に入学してから、早くも4年がたとうとしています。私が入学したころは、4回生には

「大人で凛としている」といったイメージを持っていたのですが、今の私が、そのように成長できたかは、少々不安が残ります。

とはいって、私にとってこの4年間は、自分の人生の中で、かけがえのない時期でした。大学に入学し、今まで経験したことの無い事をやりたいと考え、スクユーバー部に入部し、夏休みに小笠原諸島に潜りに行つたこともあります。また、部活やクラスで知り合った友人と、将来の夢や不安、今の悩み等、様々なことを、一晩中話し、笑ったことは、今でも私の大切な思い出の一つとなっております。この大学生という時代を、多様な考え方や性格をもった友人たちと過ごすことができ、私は非常に有意義な、かけがえの無い時間を得ることが出来たと考えております。

学生生活を楽しむ一方で、勉強面では先生方の丁寧なご指導のもと、日々楽しく勉学に励むことが出来たと考えております。しかしながら、授業のたびに復習する習慣がついておらず、テストの前に、必死に図書館にこもって勉強することもありました。今、振り返れば、もう少し真剣に日々の授業に励むべきだったと悔やまれます。

そして今年に入り研究室に配属され、私は中辻教授の水システム研究室で学ぶこととなりました。汚いイメージの強い大阪湾の水質改善には、前から興味があったので大阪湾の湾奥部における水質を調査、解析する研究テーマを選びました。自分なりに精一杯努力して納得のいく卒業論文を書き上げたいと思っております。9月には実際に船に乗って底泥を採取する調査にも参加させていただきました。まだまだ研究については、右も左も分からない私に、親身になって教えてくださる先生方や先輩方には、日々感謝しております。現在は、研究室の先輩方や、同学年のみなさんと、学外に出かけたり、時には学校の屋上で夕日を見たり、院試勉強と称して一晩中研究室で語り明かしたり…と、話せば尽きないほど楽しい時間を過ごさせていただいております。このように日々楽しく研究に励むことが出来るのも先生方や、先輩方、同学年のみなさんのおかげだと考え、この研究室に配属されたことを幸せに思います。

私はこの夏、公務員試験を受け、無事大阪府に合格

することができました。就職活動の際には学校で、説明会を開いていただき、模擬面接などもしていただきました。分からぬ点や不安な点は先生方、先輩方に相談にのっていただきました。みなさんの協力があったからこそ、合格できたのだと感謝しております。

最後になりましたが、私は大阪大学に入り、勉強し、遊び、様々なことを学べたことを幸せに、また誇りに思います。先生方には多大な指導をしていただき本当に感謝しております。また、楽しく大学生活を送ることができたのも、先輩方や同学年の友人達、家族の支えがあったからだと考え、感謝しております。ありがとうございました。



「残りの学生生活」

建築工学科4年

落合奈津子

私は1983年に生まれました。世間では、東京ディズニーランドが開園した年です。小学生のときにバブルが崩壊し、幼かったのでジュリアナ東京のお立ち台と、「バブル」という言葉の響きに楽しさを感じていたことを憶えています。中学生のときに、「次の首相は小渕さんより小泉さんの方がいいなー」なんて言っていましたが、今は小泉首相の時代になりました。そして、アメリカで同時多発テロが起きたのは、高校3年生の体育祭の前日でした。今ようやく、政治や、国際情勢、社会が見えてきたと同時に、自分が生まれ育った環境がいろいろな意味で恵まれていたということも感じています。

特に最近よく感じることは、食べ物などの物質的なモノに恵まれていただけでなく、私たちの周りには「情報」があふれ、それを受動的に受け取っていたということです。当たり前に教育を受け、メディアからは日々新情報が送られてきます。Google検索することを「ぐぐる」とも言いますが、わからない言葉はとりあえずネットで検索。それでわからなければ、みんな知らない、と開き直って終わりです。

勉学に関して言えば、目の前に出された料理を食べるよう、受身で勉強をしてきました。勉強は好きですが、思い返しても貪欲に知識を追った経験はありませんでした。そのせいか、この大学で勉強している意味さえも見失ったことがあります。

しかし、大学で建築工学と出会ってから、私の姿勢は大きく変わりました。日常の全てが関わり、細かいことにも気を配らなければならない反面、全体を総括的に捉える能力が必要なこの学問に出会ったとき、自分から行動せずにいられなくなりました。興味を持った建物の場所に足を運んだり、直接建築に関係ないことにも挑戦したり、とにかくたくさん幅広い経験をしようと過ごしてきたこの3年は、本当に充実していました。

特に自分にとって大きな経験だったのは、3年生の夏に行った北欧での短期間研修です。企画段階から全てを自分たちで作り上げていく中で、私は自分自身を大きく成長させることができました。

このような経験を得る中で、わかったことがいくつあります。一つは、今まで自分が得た知識はすべて、先人たちの偉業が脈々と受け継がれてきたバトンを受け取ったものであるということです。また一つは人と人がつながって、ものごとは創られているということ。そして、純粋に学生でいられるのはこの大学生が最後だということです。

以前に何かの本で、「大学生というのは最後の消費の場である」という内容のエッセイを読んだことがあります。そのときはピンときませんでしたが、今はよくわかります。膨大な量の学問を、私たちは搔い摘んで頂戴し消費してきました。しかし、数年のうちに社会の一員として、何かを生産していく立場になります。もちろん、一生勉強の精神を忘れてはならないけれど、もらったバトンを次に渡し、自分の何かで社会に貢献していかなければなりません。今私はこの恵まれた勉学環境を十分に生かして自分に力をつけなければならないと思っています。そして社会に出た時に、時代を受け渡す一員になる強さとしなやかさを身につけておこうと思います。

また、人ととの関係を大事にすること、世界中に友人をつくることも残りの学生生活のテーマにしてい

ます。たくさんの人と関わって、その人の考え方・生き方・文化に触れ、自分自身を、日本という国を再認識していくつもりです。

今現在は卒業論文に取り組んでいます。そして、来年からは大学院進学・交換留学を計画しています。先輩方が積み重ねてきた研究のバトンをもらい、何かしら形の残る結果を出さなくてはならないことに重みを感じます。しかし、この卒業論文に全身全霊をかけて取り組み、ステップを確実に踏んでいくつもりです。



「学校生活について」

土木工学科3年

林 宏名



大学生になってから早くも二年の歳月が過ぎ去ってしまいました。私は現在3回生であり、ぼちぼち友達たちも就職活動というものに突入していき、妙な焦りを感じていることを否めませんが、私の所属する大阪大学地球総合工学科土木工学科では、3回生になった現在、ようやく専門色の濃い授業が溢れるようになってきました。特に1回生の頃は高校生の延長のような雰囲気がプンプン漂っていて、授業が面白くないなあと感じることもありましたが、専門性が高まるにつれてとても興味を持って授業に臨めるようになりました。中には大阪府の職員の方や阪大土木のOBで現役の会社員の方を講師に招くなど、とても工夫の見られる授業もあり、本当に面白い内容となっています。

先生方もとても気さくで、研究するにあたって良い環境が備わっているように思います。毎年開催される土木工学科の親睦パーティーは、そんな先生方の親しみやすさが最も顕著に表れる場であると思います。普段は見られない先生方のお茶目な一面が見れたり、ざっくばらんな話ができたりして私はこのパーティーが大好きです。

およそ40名の仲間が集うクラスでは、小学校に居るような統一感はさすがにありませんが、仲良くしています。土木工学科に分属された2回生から1年以上経つ

た先日、ようやくクラスコンパが初開催され9割以上のクラスメイトが集い、仲の良さが改めて実感できました。特に定期試験前になると普段では見られない団結感がどこからともなく沸きあがりますが、普段はどこか個人プレーに走っている感じがします。それはひょっとするとキャンパスの立地に一因があるかもしれません。現在、私たちの通う大阪大学工学部は吹田キャンパスにあります。この吹田キャンパスはかつてのニュータウンである千里ニュータウンに位置するため周囲には何もないのです。クラブやサークルもメインは豊中キャンパスになっていることが多く、学校が終われば豊中キャンパスに移動するなど、即座に吹田キャンパスを離れたくなるのです。しかし、逆に言えば、研究するにあたっては絶好の地といえるかもしれません。

来年には4回生になり、本格的な研究生活に移っていくわけですが、あまりそのことについてクラスで話題になることはありません。将来についてあまり話題に上りませんが、実はみんな胸のうちに秘めた将来設計があることを私は知っています。というのも、夏季実習という名のインターンシップにはみんなやたらとやる気があるからです。学部生生活は残りが少なくなったましたが、1日1日を大切にして、充実した学校生活を送って行きたいと思います。

「夏休みを終えて」

建築工学科3年

宿利 隆



後期の授業の開始日、予定では夏休み中に済ませておくはずだった原稿をようやく書き始めました。今回、在校生として「構築会たより」にこうやって執筆することは、うれしくもあり、妙なプレッシャーを感じながら書いています。なんせ文才というものがまったく無いので、気の利いた文章はかけず、書くべき内容が特に見当たらないということもあり、ここは項目にそって、一人の阪大生の日常をありのままに書きたいと思います。

今年の夏休みから、軽く振り返ってみたいと思います。実家から戻って、海外旅行などに出かける友達もいる中、ゼネコンでの模型製作や設計補助のアルバイトが僕の夏休みにとって大部分をしめました。実際の設計の現場に触ることは、刺激になったし、技術的にも進歩した点は多いと思います。ゼネコンでのアルバイトの特徴としては、大きなプロジェクトに携わるのが大きな利点であるのではないか。普段課題でやっているような規模のものでもありますが、実際の設計での細部へのこだわりや、構造、設備との関係性は課題では実現しにくいものです。また、自分がすこしでも携わったものが本当に建つと考えると、わくわくしてくるものです。

休日は、主に唯一の趣味である街歩きをしていました。京都などの趣のある町並みや、ミナミやキタの都会的な感じや活気もどちらも好きで、見るだけでも結構楽しんでいます。地方から出てきているので、いまだに大阪の街は新鮮に感じます。また、プロダクトデザイナーや商業建築に興味があるので、街にはそれらの情報収集としてもよく足を運びます。個人的にはそういった授業なんかがあったらしいのになって思っています。これらのような興味のあることに関連した仕事をすることが今の夢もあります。

ここで、去年の夏休みは何をしていたのか思い出してみると、今年は参加できなかったのですが、デザイナーズウィークの学生展に出展するための家具を、授業でお世話になった岩野先生のもとに1週間近く毎日、長岡京にある大阪成蹊大学のアトリエにバイクで40分近くかけて製作に通っていた気がします。それまでにはデザインを決める会議と称して、夜遅くまで友達の家に集まっていました。今思えば建築以外の本格的な製作は初めてで、グループで1つのものをつくったのも初だったので、手探り状態で試行錯誤しながらつくりていったのですが、ものづくりの大変さや面白さがよくわかった気がします。東京まで展示した作品を見に行ったのですが、自分たちのつくったものが人に見られるというのは、なんともいいがたい高揚感というか、そんなものを感じました。

最後に、自分も3回生になり、残りの学生生活は刻

一刻と短くなっていく一方なので、進学、就職したのち、阪大建築を出たことを誇りに思えるように、大阪大学でしか学べないことを今のうちにしっかり学んで、将来に生かしていきたいと考えています。

何度かこの文章を読み返してみたんですが、ボキャブラリーがないというか、数年後、数十年後に読み返して、恥ずかしい思いをしそうな気がしてなりません。



「土木工学科目に分属されて」

土木工学科目2年

長澤稔郎

2回生になり、土木工学科目に分属されてから早半年が経とうとしています。

1回生の時に比べて、専門的な勉強が圧倒的に増え、その内容もこれまでとは比べ物にならないほど難しいものばかりです。2回生に進級したばかりの頃は、各講義の板書を必死にノートに書き取り、また次々に出来る課題やレポートの多さに戸惑い、それをこなしていくのに精一杯の毎日でした。その課題をこなしていくには、出題された範囲の内容を理解しないければならず、何度も教科書やノートを読み直したり深夜に友達にメールで聞いたりするなど、最低限のことをこなしていくだけでもとても大変でした。

しかし、それも日を追うごとに段々慣れてきて、毎週のスケジュール管理ができるようになり、何曜日までにどのレポートを仕上げてしまおうとか、そういうことが考えられるようになり、そのうち勉強に対する取り組み方そのものが変わってきたように思います。

2回生になってからの勉強で最も変わったと思うことは、これまでのように「やらされる勉強」ではなく、「自分でする勉強」になったということです。わからない問題があれば、自分で図書館や本屋に行って参考書を探したり、先生に直接質問に行ったりしました。また、今までに比べて、休み時間などに親しい友達との間で勉強の内容について話すことも多くなりま

した。それはもちろん、専門の教科の内容が難しくて、そうやって必死に喰らいついでいかないと取り残されるような気がしていたからということもありますし、自分の中で勉強に対する思いが変わったということもあると思います。土木工学は、1回生の時から行こうと考えていて、今やっている勉強は自分でやりたいことをするために必要な勉強と言えます。そういう意味でも、今までとは違って人にやらされるのではなく、自分から勉強に取り組むことができるようになってきたと思います。

一時期は毎週毎週力学関係の話ばかりで退屈に思つてしまつたこともあります。しかし、土木工学科目の親睦会や、ちょっとした空き時間にいろんな先生がたから土木の分野から就くことの出来る仕事の話を聞くことができたり、土木セミナーに参加したりすることによって、土木工学という分野について少しずつ見えてきて、面白そうという気持ちが大きくなっていました。

この先、もっと難しい内容の勉強も増えてくるとは思いますが、頑張っていきたいと思います。



「隨想」

建築工学科目2年

平野暁子



今日は9月30日。2ヶ月もあった夏休みが終わってしまった…。

振り返ってみるとこの夏休みは、全体としてはかなり充実したものだった。愛知万博に行った。初めて北海道や鳥取へ旅行した。9月にはいってからは所属する吹奏楽団の合宿やコンサートもあって、その練習にと、毎日愛用のトランペットを鳴らしつつ、なかなか忙しい毎日を送った。といっても、夏休み。ほとんど毎日、十分すぎるくらい睡眠はとったし、非生産的なゲームなどで無意味に時間をつぶした日もあった。授業開始を目前に控えた今、このように過ごした時間を悔いても後の祭りである…。

もちろん、バイトもした。夏休みの前半は、ほぼ、これでつぶれたと言ってもいい。バイトは、勉強が嫌いな中学三年生の女の子の、家庭教師である。

私が受験生の頃、特に、浪人していた頃は、大学に入つてからするバイトの候補に「家庭教師」や「塾の講師」はなかった。むしろ、あえて候補からはずしていた。家族や友人にも、私はカテキヨや塾講はしないと断言していた。なぜ、そこまで毛嫌いしていたのか、今となってはもうはっきりとは思い出せないが、おそらく「受験」というものにさんざんふりまわされた私としては、もう受験に関わるようなことをしたくないと思っていたのだと思う。よく知らないことを、いかにも知っているふりをして、何も知らない子供に教えることになるだろう自分も嫌だったので知れない。

人間の考え方というものは、周囲の環境や、自分の置かれた立場、付き合う友人によって変化していくものだ。高校のとき、髪を染めるなんてありえない！と思っていた自分の黒髪も、今ではちゃっかり茶色、しかも人工的に作られたうねりを伴っている。

受験で、さんざんふりまわされたからこそ、教えられることがある。そう思つて、家庭教師を始めた。バイトを探し始めたのは、もちろんお金を稼ぐためだったが、家庭教師のバイトを始めて半年になる今、もうお金をもらうためにやっているという意識はない。いや、ほんとうに。半年教えてくると、生徒が妹のようにかわいいと思つてならない。はじめは、「お金をもらえて嬉しい」だったのが、いつのまにか、日々成長していく生徒を見守るのが喜びになっている。私と二人三脚で、必死に勉強した成果が夏休み明けのテストで発揮でき、最近、彼女に勉強への意欲が沸いてきたのを見るにつづけ、もっともっと教えてあげたい、できるようになっていく姿を見守つてきたいと強く思うようになっている自分がいる。不思議なものだ。

将来、教育職に就くつもりは全くない。このバイトだって、一年限りの受験指導。けれど、私はこの夏、このバイトに真剣になった。これも、この夏を充実したものにしてくれた一つの要因である。

夏休みは終わってしまった。また、授業と課題、部活、バイトをひたすらこなす日々の始まりである。

2005年度役員会報告

日 時： 2005年5月27日（金） 17：30～18：45
場 所： 大阪大学中之島センター 7階講義室3

<協議内容>

1. 構築会会則の変更について

開会に先立ち、本年4月の改組に伴い構築会会則を変更したことが幹事団より報告され、審議の結果承認された。

2. 2004年度事業報告

(1) 役員会の開催、(2) 構築会たより・名簿の発行、(3) 記念品贈呈、(4) 支部活動への補助、(5) 各専攻への事業補助、(6) 構築会を考える会、(7) ホームページの運用、などの本部活動報告、および愛知、大阪、東京、兵庫、広島の各支部活動の報告がなされた。このうち大阪支部については、2004年度活動実績がなかったため、協議の結果2005年度の支部活動補助は行わないこととなった。それ以外の件については、審議の結果全て原案通り承認された。

3. 2004年度会計報告

担当幹事より、収入・支出状況の説明と監査結果の報告がなされ、承認された。

4. 2005年度役員選出

新役員に、坂 雅勝 会長(A69)、佐俣千載 副会長(C71)、鍋島康之 監事(C88)、椎名辰之 監事(A88)、山中俊夫 幹事長(A82)、入江政安 幹事(C97)、2005年卒の学年委員として窪田勇輝 氏(C05)、川島尚教 氏(A05)がそれぞれ選出された。また、飯田 匡 幹事(A92)の留任が了承された。

5. 2005年度事業計画案および予算案

担当幹事より2005年度の事業計画案、予算案が提示された。厳しい財務状況のため増収に繋がる活動を行うことが確認された以外は原案通り承認された。

（記：2004年度幹事長 飯田克弘（C教））

◇ 2004年度 会計報告 ◇

●収入の部

	1998年度実績	1999年度実績	2000年度実績	2001年度実績	2002年度実績	2003年度実績	2004年度実績	2004当初予算
会 費	8,182,500	5,949,500	6,419,300	6,354,270	5,077,520	4,840,636	5,581,710	5,000,000
広 告 料	1,140,000	1,660,000	1,160,000	559,160	718,740	438,845	419,340	700,000
利 息	3,032	1,974	1,960	1,437,089	5,152	57	422	2,000
寄 付 金 他	0	0	0	0	0	0	0	0
そ の 他	0	0	0	0	0	54,000	0	0
単年度小計	9,325,532	7,611,474	7,581,260	8,350,519	5,801,412	5,333,538	6,001,472	5,702,000
前年度繰越	6,732,258	7,586,460	6,991,873	6,730,119	8,512,609	6,539,695	6,175,173	6,175,173
収 入 計	16,057,790	15,197,934	14,573,133	15,080,638	14,314,021	11,873,233	12,176,645	11,877,173

●支出の部

	1998年度実績	1999年度実績	2000年度実績	2001年度実績	2002年度実績	2003年度実績	2004年度実績	2004当初予算
名簿印刷費	3,819,400	4,690,713	4,255,587	2,384,130	4,126,710	2,106,696	4,115,679	4,100,000
名簿発送手数料	0	0	0	0	0	0	0	0
郵便通信費	1,093,600	131,052	239,074	143,263	170,447	77,764	86,126	150,000
謝 金	334,500	322,000	327,000	390,000	285,000	312,000	322,000	320,000
記念品代	286,125	197,925	275,100	246,780	243,660	124,330	153,580	130,000
支部援助金	1,543,000	1,584,500	1,577,300	1,658,300	1,823,450	1,697,450	1,678,100	1,800,000
教室寄付金	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000
行 事 費	0	0	0	579,503	0	0	0	0
会 合 費	171,880	159,590	193,312	83,795	239,335	405,500	197,400	250,000
出 張 費	39,860	58,860	59,760	59,760	0	59,760	47,400	60,000
慶弔費	76,840	130,530	580	95,602	63,300	105,833	215,890	50,000
備 品	0	0	0	0	0	0	0	0
消 耗 品 費	420	13,141	5,650	13,651	13,604	462	1,218	20,000
振替手数料	139,955	114,750	109,651	11,130	8,820	8,265	12,135	10,000
会費滞納分催促費	165,750	0	0	102,115	0	0	0	150,000
そ の 他	0	3,000	0	0	0	0	0	0
支 出 計	8,471,330	8,206,061	7,843,014	6,568,029	7,774,326	5,698,060	7,629,528	7,840,000
<hr/>								
残 高	7,586,460	6,991,873	6,730,119	8,512,609	6,539,695	6,175,173	4,547,117	4,037,173

●支出の部

	1998年度実績	1999年度実績	2000年度実績	2001年度実績	2002年度実績	2003年度実績	2004年度実績
定額貯金	3,800,000	3,800,000	3,800,000	5,200,000	5,204,990	5,204,990	4,200,000
郵便為替	762,770	483,660	83,750	503,140	2,930	32,620	5,870
郵便貯金	1,640,752	1,850,969	634,774	2,126,325	1,174,118	438,308	0
銀行預金	1,318,471	848,228	1,992,177	631,755	30,584	439,442	340,023
現金	64,467	9,016	219,418	51,389	127,073	59,813	1,224
合計	7,586,460	6,991,873	6,730,119	8,512,609	6,539,695	6,175,173	4,547,117

◇ 2005年度 事業計画 ◇

事業項目	実施時期
1. 構築会たよりの発行・配布	2005年11月頃
2. 記念品の贈呈 (男性: タイピン、女性: ネックレス) 卒業者、新規修了者 卒業30周年の会員	2006年3月 随時
3. 支部活動への補助金交付	随時
4. 社会基盤・建築工学部門への事業補助	随時
5. 役員会の開催	2005年5月27日

◇ 2005年度 予 算 ◇

●収入の部

	2005年度予算	備考	2004年度実績	2003年度実績	2002年度実績	2001年度実績	2000年度実績
会費	5,500,000	前年度会費納入実績に応じて	5,581,710	4,840,636	5,077,520	6,354,270	6,419,300
広告料	450,000	2003年度(たより発行年度)並み	419,340	438,845	718,740	559,160	1,160,000
利息	1,000		422	57	5,152	1,437,089	1,960
寄付金他	0		0	0	0	0	0
その他	0		0	54,000	0	0	0
単年度小計	5,951,000		6,001,472	5,333,538	5,801,412	8,350,519	7,581,260
前年度繰越	4,547,117		6,175,173	6,539,695	8,512,609	6,730,119	6,991,873
収入計	10,498,117		12,176,645	11,873,233	14,314,021	15,080,638	14,573,133

●支出の部

	2005年度予算	備考	2004年度実績	2003年度実績	2002年度実績	2001年度実績	2000年度実績
名簿印刷費	2,200,000	たより発行年並み	4,115,679	2,106,696	4,126,710	2,384,130	4,255,587
郵便通信費	100,000	平年並み	86,126	77,764	170,447	143,263	239,074
謝金	320,000	平年並み	322,000	312,000	285,000	390,000	327,000
記念品代	150,000	前年度並み	153,580	124,330	243,660	246,780	275,100
支部援助金	1,700,000	前年度並み	1,678,100	1,697,450	1,823,450	1,658,300	1,577,300
教室寄付金	800,000	前年度並み	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000
行事費	0		0	0	0	579,503	0
会合費	250,000	平年並み	197,400	405,500	239,335	83,795	193,312
出張費	60,000	平年並み	47,400	59,760	0	59,760	59,760
慶弔費	100,000	平年並み	215,890	105,833	63,300	95,602	580
備品	0		0	0	0	0	0
消耗品費	10,000	平年並み	1,218	462	13,604	13,651	5,650
振替手数料	10,000	平年並み	12,135	8,265	8,820	11,130	109,651
会費滞納分催促費	0		0	0	0	102,115	0
その他	0		0	0	0	0	0
単年度小計	5,700,000		7,629,528	5,698,060	7,774,326	6,568,029	7,843,014
次年度繰越	4,798,117		4,547,117	6,175,173	6,539,695	8,512,609	6,730,119
支出計	10,498,117		12,176,645	11,873,233	14,314,021	15,080,638	14,573,133

構築会役員一覧

会長 坂 雅勝 (A69)
 副会長 佐 俣 千載 (C71)
 監事 鍋 島 康之 (C88) 権名辰之 (A88)
 幹事長 山 中 俊夫 (A82)
 幹事 飯 田 匡 (A92) 入 江 政 安 (C97)

学年委員

	土木	建築
1950		
1951	木田五一郎	伊藤俊夫
1952	竹山喬	木村康彦
1953	高野浩二	大久保昌一
1953	濱宏	片倉健雄
1954	松山巖	杉原正昭
1955	堤道夫	荒木兵一郎
1956	波田凱夫	山田俊満
1957	広内徹	秦洋一郎
1958	豊島良三	脇山広三
1959	上根善教	金田宏
1960	小野敦	藤井象一
1961	村上昇	眞塚達夫
1962	榎木帳男	入江恂一
1963	松井保	中江新太郎
1964	濱田圭一郎	森田晴美
1965	島田壯八郎	小島孜
1966	宇野剛正	市嶋久嗣
1967	梶川靖治	竹島祥夫
1968	谷口剛也	香西喜八郎
1969	武内一彦	大津俊雄
1970	阿部信晴	木林長仁
1971	東伸司	角彰
1972	木村正二	森田孝夫
1973	森永勝登	木村修治
1974	青木利博	巽昭夫
1975	前田敏	家倉泉
1976	長谷川善信	鈴木克彦
1977	蓮輪賢治	古宮嘉之

	土木	建築
1978	後野正雄	吉村英祐
1979	正田正一	有坂伸二
1980	辰谷義明	多田元英
1981	戸上拓也	菅原正晴
1982	磯㟢正哉	山中俊夫
1983	山辺健二	丁野成人
1984	藤田眞	板田昌彦
1985	俠井昌宏	杉本正三
1986	山内浩	桐野健治
1987	武藤和好	芦田智之
1988	鍋島康之	権名辰之
1989	小野正博	川合帳裕
1990	星加益朗	中塙光一
1991	村上茂之	向井洋一
1992	小野潔	岩井潔史
1993	大西弘志	若澤達史
1994	神田忠士	澤井晃
1995	荒木進歩	西豊
1996	松本忠	田中聰
1997	山内淳平	八木秀樹
1998	木村充	木橋本武士
1999	下村公一郎	寺前隆
2000	内田美範	多田正治
2001	橋本保則	軸丸久司
2002	竹口直樹	山本訓久
2003	蒲原武志	藤本正基
2004	青木康素	柴田景太
2005	窪田勇輝	川島尚教

支 部 役 員 一 覧

[役員大表支部]

愛知支部	支 部 長	矢 野 修 一 (C74)
	副 支 部	青 木 伸 一 (C81)
	幹 事 長	降 簾 達 生 (C83)
大阪支部	支 部 長	井 上 章 (C73)
	副 支 部	沢 田 隆 志 (A72)
	副 支 部	中 村 順 行 (C74)
	幹 事 長	中 村 俊 策 (C81)
東京支部	支 部 長	中 村 康 一 (A73)
	副 支 部	上 阪 恒 雄 (C70)
	幹 事 長	浜 井 邦 彦 (C82)
兵庫支部	支 部 長	西 田 泰 吾 (A68)
	副 支 部	佐 俣 千 載 (C71)
	幹 事 長	吉 村 文 章 (C82)
広島支部	支 部 長	中 山 隆 弘 (C68)
	副 支 部	芥 川 省 三 (C74)
	幹 事 長	増 田 伊 知 郎 (C80)

【大阪支部たより】

大阪支部では平成16年度は諸般の事情で総会を開催できませんでしたが、このたび2年ぶりに11月2日の午後、見学会と総会を開催いたしました。

見学会は都市再生の緊急整備地区にも指定され今後の大規模な開発が見込まれる中之島地区で整備が進められている新しい鉄道・中之島新線の建設現場と吹田の万博記念公園から中之島地区に移転、リニューアルし昨年11月にオープンした国立国際美術館を見学しました。

中之島新線の現場はシールド工事はまだ始まっていませんが、駅部を中心に開削工法の土留め工事がほぼ終わり、掘削の真っ最中、また京阪電鉄の天満橋駅部では営業線の切り替え工事が順調に進むなど地上からでは想像できないほど進展しており、全体の進捗率も約28%とのことでした。平成20年度内の完成が待ち遠しいですね。

国立美術館は残念ながら開館日であったため、新しい建物の構造部など裏側の見学は出来なかったものの、建設時のビデオで説明を受けるとともに、展示物の見学で大阪の文化の高さに触れることができました。

見学会の後は、これも昨年の4月に開場した大阪大学の中之島センターの「佐治敬三メモリアルホール」で総会と懇親会を、一昨年を大幅に上回る約90名近くの会員の参加のもと開催いたしました。

大学からは社会基盤工学部門から常田教授、建築工学部門から相良教授に出席をいただき近況報告をして頂いた他、本部の坂会長や地球総合工学専攻長の出口教授にも出席いただき盛会のうちに懇親会を終えることが出来ました。

これら全てを短期間のうちに準備し成功に導いてくれたのは、心機一転新たに参加いただいた幹事の皆さん、そして昨年から引き続き参加していただいている幹事の方々との連携と熱意の賜物と改めて17年度の支部役員の皆さんに感謝するところであります。

大阪支部は会員数が1300名を超え、構築会の中でも最大規模の支部であります。

これから多くの皆さんに参加いただける企画を考えて行きたいと思っておりますので、会員の皆さんのが声も併せて聞かせていただければと思います。

最後に感謝を込めて17年度の支部役員を紹介させていただきます。

支 部 長	井 上 章 (C73)
副支部長	沢 田 隆 志 (A72) 中 村 順 行 (C74)
監 事	中 平 明 憲 (C77) 和 田 雅 洋 (A77)
幹 事 長	中 村 俊 策 (C81)
幹 事	榎 原 範 明 (C78) 奈 良 靖 (C78) 指 田 孝 太 郎 (A80) 横 田 隆 司 (A83) 吉 田 一 夫 (C84) 指 吸 政 雄 (C86) 谷 口 友 英 (C87) 中 塚 光 一 (A90) 松 村 暢 彦 (C91) 下 村 健 太 郎 (A98)

(記：幹事長 中 村 俊 策 (C81))

【愛知支部たより】

愛知支部は、東海三県といわれる愛知県、岐阜県、三重県に在住もしくは勤務している会員で構成しています。東海三県での近況をお知らせします。

・愛知支部総会を開催しました。

平成17年2月2日(水) 愛知支部総会として、大阪大学卒業生である元衆議院議員 青木 宏之様にご講演をいただきました。青木様は大学卒業後、県会議員を経て衆議院議員になられました。引退後、青木様の哲学を書かれた「幸福になるための考え方」(文芸社) を出版されました。

総会では、衆議院議員在任中のエピソード、ご病気を通じて得られた哲学、書籍出版のことなどをお話をいただきました。

・愛知万国博覧会が開催されました。

平成17年3月25日から9月25日の185日間、愛知県にて、愛知万国博覧会が開催されました。日本国際博覧会協会では、愛・地球博（愛知万博）の経済波及効果について「最大で約七兆七千億円に上る」と発表しました。さらに、「将来の礎になるようなインフラ整備ができたほか、数字の面でも予想を上回る効果をもたらした。中部地区のみならず、日本全体にも大きな財産を残した」としました（広域の幹線道路や中部国際空港の交通基盤整備まで含めると約三兆五千億円。残りの四兆円余りが周辺産業への間接効果）。万博に関連した雇用創出は全国で約45万人で、景気回復にも貢献したといえます。

現在愛知県周辺地域では、万博後の街づくりを推進しているところです。

今年度の愛知支部役員は以下のとおりです。

支 部 長 矢 野 修 一 (C74)

副支部長 青 木 伸 一 (C81)

顧 問 今 倉 邦 彦 (A57)

森 下 弘 士 (C58)

監 事 格 清 哲 夫 (A72)

幹 事 長 降 簡 達 生 (C83)

東海地方にご異動の際には是非お仲間に加わっていただきたいと思います。

(記：幹事長 降 簡 達 生 (C83))

【東京支部たより】

東京支部では、平成17年7月20日に、平成17年度講演会および第19回支部総会・懇親会を開催しました。

講演会では、国土交通省航空局の坂様より「羽田空港の再拡張事業」、建築工学部門の多田先生より「インターネットで異種プログラムを統合した数値解析コラボレーション」と題された、ご講演をいただきました。

また、総会・懇親会においては、来賓として、大学から社会基盤工学部門長の常田教授、建築工学部門長の相良教授、構築会本部から坂会長に、お忙しいスケジュールの合間を縫ってご参加いただき、約90名の支部会員とともに懇親を深めることができました。

総会では平成16年度の活動報告および会計報告と平成17年度の活動計画が承認されました。また、今年度は支部長の改選期にあたり、新たに中村新支部長の就任が承認されました。なお、その他役員についても若干の交代があり、平成17年度は以下の役員で活動を開始しています。

支 部 長	中 村 康 一 (A73)	幹 事 新 村 洋 行 (A81)
副支部長	上 阪 恒 雄 (C70)	幹 事 前 田 信 之 (A81)
監 事	高 井 正 行 (A77)	幹 事 鬼 丸 貞 友 (A82)
幹 事 長	浜 井 邦 彦 (C82)	幹 事 大 田 哲 也 (C83)
幹 事	堀 内 辰 夫 (C76)	幹 事 高 久 雅 喜 (C84)
幹 事	藤 本 信 夫 (A77)	幹 事 石 井 晃 (C89)
幹 事	柳 原 純 夫 (C77)	幹 事 米 島 幹 雄 (C89)
幹 事	丑 場 英 温 (A78)	幹 事 西 山 誠 治 (C91)
幹 事	池 田 正 人 (C78)	幹 事 高 徳 裕 平 (C96)

(追伸)

東京支部では、連絡手続きの合理化を図るため、会員の皆様のmailアドレスのデータベースを構築しています。もちろん、ご了解が得られた方に限りますが、支部総会案内への返信などの際にmailアドレスもあわせてご連絡いただけると幸いです。

(記：幹事長 浜 井 邦 彦 (C82))



懇親会にて（ご来賓の方々と）

【兵庫支部たより】

兵庫支部の平成17年度の活動のうち、8月26日に会員55名参加のもと開催した見学会および懇親会についてご紹介しましょう。

見学会では、まず10月にグランドオープンを間近に控えた「兵庫県立芸術文化センター」を見学しました。芸術文化センターは阪神・淡路大震災からの復興のシンボル事業であり、震災10周年にあたる今年、芸術文化の創造拠点としてオープンするものです。

移動式の音響反射板により、残響時間をコントロールし、コンサートだけでなくオペラ、バレエにも対応できる大ホールは、マホガニー材をふんだんに用い、ヨーロッパの名門オペラハウスを彷彿させるものでした。

演劇・伝統芸能などを対象とした中ホール、室内楽用のアリーナ形式の小ホールなどの建築物にとどまらず、佐渡裕芸術監督のもと、独自の管弦楽団（平均年齢27歳、日本人24人、外国籍13カ国24人の48人編成）の結成や山崎正和芸術顧問のもと、自主企画の演劇などハード、ソフトが一体となった整備に見学者一同感心させられました。

2つ目の見学場所である「尼崎の森中央緑地」は、震災時の神戸製鋼等の工場跡地を"尼崎21世紀の森"として再生する事業の先導プロジェクトで、平成18年秋の"のじぎく兵庫国体"の水泳競技会場ともなるスポーツ施設を見学しました。高度成長期の尼崎臨海部を知る（比較的年齢の高い）参加者は、尼崎臨海部の変貌に驚きの声を上げていました。

真夏の見学会の後は、待ちに待った懇親会。神戸市の新長田南震災復興市街地再開発事業の一つとしてできた全国最大級の沖縄物産店「琉球ワールド」で、建築工学部門長の相良先生、社会基盤工学部門長代理の奈良先生をお招きして、盛大に行われました。

このほか支部では、11月11日に講演会・総会を開催予定で、このような多彩な催しを通じ、会員間の交流と情報交換の場を提供していきたいと考えています。

【平成17年度兵庫県支部役員】

支 部 長	西 田 泰 唬 (A68)
副支部長	佐 保 千 載 (C71)
監 事	渡 辺 哲 男 (C71)、園 田 学 (A78)
顧 問	松 浦 勢 一 (C53)、王 柏 群 (A54) 木 村 公 之 (A59)、入 江 恣 一 (A62)
	神 田 徹 (C63)、明 渡 薫 輔 (C65)、岸 田 威 (C66)
相 談 役	長 尾 直 治 (A69)、川 谷 充 郎 (C72)、道 奥 康 冶 (C77)
幹 事 長	吉 村 文 章 (C82)

(記:幹事長 吉 村 文 章 (C82))



兵庫県立芸術文化センターを視察する支部会

【広島支部たより】

【ひろしま支部】

構築会広島支部は1999年5月に発足し、今年で7年目を迎えました。

平成16年度は、6号から23号まで過去最多となる10個の台風が上陸し、また、10月23日には、新潟県を中心とした中越地震が発生するなど、日本各地で大きな被害が発生しました。更に、12月26日には、スマトラ島沖で大地震が発生し22万人以上の死者が出るなど、防災関係者にとって大変慌しく印象深い年となりました。

広島県においても、最大瞬間風速が過去最高の60.2m/sを記録した台風18号や台風16号、23号の襲来を受け、大きな被害を受けております。

このような中、11月5日、大阪大学の恩師でもあり、財団法人災害科学研究所の所長として防災問題に取り組まれている樋木先生に遠路お越しいただき、ご講演を賜る機会に恵まれました。

日中は、支部会員が同行して、台風被害のあった観音マリーナや廿日市木材港、宮島港等の被災状況を船から視察していただき、夕方の講演会では先生の最近のご活動状況をご紹介いただきました。技術的な課題解決はさておき、人のネットワークの大切さを説かれた先生の言葉が強く心に残りました。

平成17年度の行事として、季節の良くなる秋に向けて、県内の現場見学会と総会（懇親会）の開催を企画しておりますので、改めてご案内致します。

最後になりましたが、他地区より広島地区に転入された方がおられましたら、広島支部役員までご連絡下さいますようお願い致します。

支 部 長 中 山 隆 弘 (C68)

副支部長 芥 川 省 三 (C74)

幹 事 長 増 田 伊知郎 (C80)

監 事 坂 手 道 明 (C71)

幹 事 蒲 原 幹 生 (C87)

小 西 英 明 (C95)

南 博 高 (C95)

久 保 充 司 (C98)

(記：幹事長 増 田 伊知郎 (C80))

構築会会則

平成17年4月1日改正

総 則

- 第1条 この会は構築会という。
- 第2条 この会は会員の親睦を計ることを目的とする。
- 第3条 この会は事務局を大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻のうち、社会基盤工学コースあるいは建築工学コースのいずれかに置く。
- 第4条 必要なときは役員会の議決によりこの会の地区支部、職場部会を設けることができる。

会 員

- 第5条 この会の会員は
- (1) 大阪大学工学部構築工学科、土木工学科、建築工学科、地球総合工学科の土木工学科ならびに建築工学科の卒業生、学生
 - (2) 大阪大学大学院工学研究科構築工学専攻、土木工学専攻ならびに建築工学専攻、旧地球総合工学専攻の地球保全総合工学領域および地域文化デザイン工学領域、地球総合工学専攻社会基盤工学コースならびに建築工学コースの卒業生、学生
 - (3) (1)(2)に対し、教育および指導を行った旧教官、旧教員、現教員および役員会の議決によって入会を認められた者とする。
- 第6条 この会の会員に次の3つの種別を設ける。
- (1) 正会員:卒業生、教官。
 - (2) 特別会員:名誉教授、元教官、非常勤講師、元非常勤講師および役員会の議決によって入会を認められた者。
 - (3) 学生会員:学部学生および上1号に該当しない大学院生。

役 員

- 第7条 この会に会長1名、副会長1名、幹事長1名、監事2名、委員若干名、幹事若干名の役員を置く。
- 会長は本会を代表し会務を総括する。副会長は会長を補佐し職務を代行する。
- 幹事長は会長を補佐し幹事団を総理する。監事はこの会の会計を監査する。
- 委員は会務を評議する。幹事は会務を処理する。
- 第8条 会長および副会長は正会員の中より役員が推薦する。
- 幹事長は土木工学専攻および建築工学専攻の教授、助教授、講師のうちから互選する。
- 委員は各卒業年次から2名ずつ、各支部から1名ずつ互選する。
- 監事は委員のうちから互選する。幹事は土木工学専攻および建築工学専攻の教官から選出する。

第9条 役員の任期は1年とする。ただし再任を妨げない。

役員会・総会

第10条 役員会は会長、副会長、幹事長、委員および幹事によって構成され、年1回これを聞く。
但し、会長が必要と認めたときは隨時これを召集することができる。

第11条 会長は必要に応じて総会を開く。

会 計

第12条 この会の費用は会費および寄付金その他をあてる。会費の変更は役員会の議決によってこれを定める。

第13条 会費は1ヶ年、正会員3,000円とする。ただし、他大学を含めた大学院在学中の正会員は半額とする。

また、卒業45周年を迎えた会員は、会費を滞納していない限り卒業46年目以降の会費を免除する。

第14条 この会の会計は監事が監査し、その承認をえて役員会でこれを報告する。

事 業

第15条 幹事団は次の各号の事業を行う。

- (1) 会員名簿の刊行と配布。
- (2) 講演会、見学会などの開催。
- (3) その他の行事。

第16条 会員が叙位、叙勲などの栄に浴した場合、会長より祝電を打つことができる。

第17条 会員が弔事の際は、次の各号による。

- (1) 正会員が逝去の場合は会長より弔電を打ち、檻または盛花一対を呈する。
- (2) 特別会員が逝去の場合は会長より弔電を打ち、檻または盛花一対を呈することができる。
- (3) 学生会員が逝去の場合は会長より弔電を打つことができる。

会則の変更

第3条 この会の会則の変更は役員会の議決によってこれを定め会員へ報告する。

付 則 この会則は平成17年4月1日より実施する。



事務局たより

会員の皆様には、平素より構築会の運営と発展にひとたなびご支援、ご助力を賜り、事務局一同心よりお礼申し上げます。さて、今年も少しだけ、事務局から会員の皆様へご報告と御願いをさせていただきたく存じます。

1. 「構築会たより」の発送について

2000年度の役員会におきまして、会費の高額滞納者に対し「会員名簿」と「構築会だより」の発送を停止することが議決されたことを受けて、昨年度の会費請求書には、滞納額が明記されるとともに「次回会費請求時に12,000円を越える滞納額があった場合、会員名簿および構築会だよりの発送を停止させて頂く」旨の文面が記載されたことはご承知の通りかと存じます。年々厳しさを増している構築会の財政状況に鑑み、苦渋の対応であり、何卒皆様方のご理解を頂戴したく存じます。当初、早ければ今年度の「構築会たより」の発送から適用される予定でしたが、幹事団での協議の結果、今年度につきましては、従来通り全会員にお送りするとともに、今一度会費納入の御願いをさせて頂くことに致しました。

2. 構築会の会費について

ご承知の通り構築会は同窓会組織ですので、基本的に卒業の時点で自動的に会員になります。従いまして、入会手続きは必要ありませんし、逆に言えば退会をすることもできません。入会した覚えもないのに毎年請求書と共に名簿や同窓会誌が送られてくる、やっかいな組織だと考える会員の方も中にはいらっしゃるかもしれません。しかし、会員の皆様方が同窓の方々や母校の先生方と連絡を取りたいとき、構築会の名簿があればどれほど便利でしょうか？また、長らく音信の途絶えていた同期生と構築会の各支部の会合で偶然会ったときの喜びはいかほどでしょうか？人生のある時期の記憶を共有する人たちの集まりが存在することは、殺伐とした社会の中で貴重なよりどころになるのではないかでしょうか。

ご承知の通り、構築会の会費は、「構築会名簿」と「構築会だより」の発行にとどまらず、記念品の贈呈、各構築会支部への活動資金援助、母校大阪大学への寄付金などに充てられ、毎年有効に活用されております。会員の皆様におかれましては、このような構築会の活動と意義にどうかご理解を賜り、今後とも会費の納入にご協力を頂きます様お願い申し上げる次第です。

3. 構築会たよりのデザインについて

これまでの誌面デザインを一新し、読みやすく親しみやすいデザインに一新いたしました。紙質なども再検討を行い、例えば新幹線のなかでも気軽に読み頂ける様に、装丁も新しく致しました。ご意見等ございましたら、お気軽に事務局にお寄せ頂ければと存じます。

4. 事務局役員の交代

今年度の役員会（2005年5月27日）をもちまして、飯田克弘幹事長（C教）、荒木進歩幹事（C95）が任期満了のためご退任され、新たに幹事長として山中俊夫（A82）、幹事として入江政安（C97）氏が就任されました。よって今年度は、山中俊夫幹事長（A82）、飯田匡幹事（A92）、入江政安幹事（C97）の3名で事務局の運営をしております。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

5. 事務局のメールアドレス

大阪大学のご厚意により、今年度新しく事務局のメールアドレスを下記の通り取得致しました。住所変更、会費のお問い合わせ、ご意見、苦情などございましたら、ご遠慮なくお知らせ下さい。

kouchikukai@arch.eng.osaka-u.ac.jp

6. 構築会ホームページ

2002年度より、構築会のホームページを下記のURLで運営しております。

<http://www.civil.eng.osaka-u.ac.jp/kouchiku/>

または

<http://www.arch.eng.osaka-u.ac.jp/kouchiku/>

今年は、吹田キャンパスと建設棟の写真集「吹田キャンパス～秋の風景～」をアップしておりますので、お時間のあるときにでもご覧下さい。

(記：幹事長 山 中 俊 夫 (A82))

謝 辞

今年度、構築会会員 故 梶本(旧姓 梶本)賀子様(A96)の御尊父 梶本義次様より構築会宛にご寄付(100,000円)を賜りました。ここに謹んで御礼申し上げますとともに、ご令嬢様のご冥福をお祈り申し上げます。

構築会 会長 坂 雅勝